
ワールドアクター

klknock

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ワールドアクター

【Nコード】

N0834U

【作者名】

klknock

【あらすじ】

それは突然の事だった・・地球に降り立った隕石は悪夢という名の化け物だった。

幼馴染を目の前で失った浅田勇人は失意のままに地球脱出計画に伴い地球を脱出する。

その先で待っていたのは希望という名の奇跡と絶望という名の物語のはじまりだった・・

(@ゲームズにて公開)

第1話

2059年3月27日 12時00分

地球に巨大隕石が接近……突如訪れた、この未曾有の事態に国連は地球脱出計画を提唱した。

国連の研究チームは激突までの推定時刻を発表……今年の12月上旬がタイムリミット であると発表。

しかし、隕石に変化が生じた……隕石が細分化したのである。世界は踊らされていた——隕石が地球に与える影響はなし。地球脱出プロジェクト参加者は落胆と怒りを現わし、シエルター組といわれる地球残留組は安堵した。

衛星カメラが衝撃の映像を撮るまでは……隕石の正体は——怪物の塊だった。

2059年10月23日 16時00分

大気圏を食い破った怪物と落下地点のロシアには世界中から集まった軍隊があった。

アースプロジェクトといわれた軍隊は、未曾有の事態に世界が、団結した歴史上最大規模の軍隊だった。 真つ赤に燃えながら地球に降って来た怪物に世界中の希望がぶつかった。

結果は——敗退。 絶望的な力を持った怪物達を人は、こう呼んだ……

レッドディスプレイ（赤い絶望）

2059年12月11日 5時00分

現在の世界人口はたったの一月足らずで十分の一にされていた。その十分の一のさらに少数、日本では今最後の希望が打ち上げられようとしていた。

「地球脱出計画が、こんな形になるとはね……」

疲れた様子で、話すのはチームリーダーのジョン・ハウンドである。俺はコールドスリープの装置の点検をしながら答える。

「仕方ないじゃないですか……人間が勝てるような相手じゃないんですから」

俺の名前は浅田勇人、ジョンに助けられた高校2年だ。俺は無気力だった……ディスプレイによって、両親と大切な幼馴染を目の前で殺された……呆然としている所をジョンさん達に助けられた。

俺は今からコールドスリープに入り、大気圏を突破することで特殊な訓練を受けなくても宇宙船に乗れるらしい。

「あなたは何も心配しなくていいからね」

春奈さんが俺に話しかける。彼女もチームの一員で日本人スタッフである。

「ハルナ！ こっちに来てくれ！ 奴らが来る前に発進する」

「わかったわ」

コールドスリープルームには10人ほどしかいなかった。それぞれ

れが自分の装置を点検し、

中に入っていく。その顔には生気は薄く、疲れ切っていた……

「君も早く入るんだ、安全な所になったら必ず起こすから」

ジョンはそう言い、装置に入った俺に語りかける。

そこで、俺の意識は途絶えた……

第2話

目を覚ますと、体がクッションのようなものに包まれているのがわかった。確か……俺はコールドスリープの機械に緊急用スイッチがあるのを思い出し右手をのばして押す。カプセルのようなものが開く……

「安全な所に……ついたのか」

周りを見渡すとコールドスリープルームは見るも無残な姿になっていた。血の臭いと壊れた機械、飛ぶ火花そして壊れた壁から赤い光が漏れていた。

そして、潰れたカプセルから人間だったと思われる肉の塊があった——死体にも慣れたもんだ——と自分に感心した。

「何が……おきたんだ……ジョンさん！ 春奈さん！」

地球脱出チームのメンバーを呼ぶが、返事はない。カプセルから出ようとしたが、船が斜めになっているのかふらついてしまう。

（事故でも起きたのか？ 何が起きた？ とりあえず外に出よう……）

ゆっくりと緊急用ハッチに向かう……赤い光は、ここから出ていた。地球の光ではないように見えた……違う星なのだろうか？

だとしても宇宙服を着ているとはいえ、頭には何もつけてない俺が無事なのはなぜか？ 考えてみると、きりがなし……

「キヤアア」

と悲鳴が聞こえた。驚いて緊急用ハッチに手を置く、ハッチが壊れて外に投げ出される。

「イテツくそ……なんだよ！」

赤い大地が、まず見えた——そして、絶望が目の前にいた——デイスピアと呼ばれ、人類が完全敗北した生物がいた。

このデイスピアは蜘蛛型の新種なのか、紅く禍々しい色をしていた。その蜘蛛型デイスピアは隣にある宇宙船を襲っていた……

そこには、信じられない事に死んだ筈の幼馴染、神宮さくらがいた。

「なっ」

と息をのむ——。

ドクンツ——知らないうちに体が動いた……生き返った気がした……状況は分からない……似てるいるだけかも知れない……でも！

「さくら——ッ！」

叫んだ。走った。デイスピアがこちらを見る。知った事か！

「勇君——」

驚いてる。叫んでる。手を伸ばしている。死んだ筈の幼馴染を捕まえた。だが、後ろにはデイスピアが迫って来る。例え、一瞬でもさくらを護りたかった。

絶望から今度こそ——

いつまでも覚悟していた一撃が来ない……恐る恐る振り返ると刀

を持った白髪の男が立っていた。人類が一体倒すのに千人、万人の犠牲が出ると比喻された怪物の足を刀で受けていた。

『大丈夫だ、すぐ終わる』

何かを言われたが、分からなかった……なぜ？ 日本人じゃないから？ 疑問は多いが、考える暇がない。

何故なら蜘蛛型ディスプレイが突進してきたのだ。

第3話

「GYAAAAA」

怪物は咆哮する。白髪の男は――
斬った。

「へっ」

変な声が出た、ディスプレイだぞ……人間が手も足も出なかった――

――怪物――

男は少し焦った様子で手首についている。機械に話しかける。

「『ベル！ 群れは、あと何分でくる？』」

「『もう目の前！ だからスパイラルがそっちに向かっている』」

『という事だ、後は任せる』

後ろから声が出たと思ったら体が宙に浮いた……

「『ぎゃあああああ』」

さくらと俺の悲鳴が重なった。

『スパイラルーひどいよー、俺一人にこいつら片付けろっていつの
』！

白髪の男の悲鳴が響いた。

「『アクア、こいつらの言語解析は進んでいるか?』」

「『おそらく、デス・ラージ（滅んだ言語）を使っているんだと思う。オートダイヤルに、一致無し……未知の文明の可能性あり』」

「『思わぬ拾いものというわけか……んっ? こいつら気絶してるぞ!』」

「『多分ラティカの恩恵を受けてないんだと思う、まったく力を感じない』」

「『了解、俺のラティカを分けながら、ゆっくり戻る。医療班の待機をさせておいてくれ』」

「『分かりました』」

気を失ってる頃……白髪の男は赤い大地を走っていた。後ろには、大地よりも紅い巨大な蜘蛛の大群が迫っていた。

「ジロックスパイダーか……その排出物で地面を赤くすることから有害生物に指定。群れを見つけた場合は処理を許可する……」

男は腕の装置から出ている映像を読みながら走っており、余裕そうだった。

「適合結果もでたし、そろそろ倒すか……」

呟いた。刀を抜いた。振り返った。

——ザシュッ——

音と共に目の前のジロックスパイダーからい直線に斬撃が奔った。声もなく一体が割れるように死んだ——後ろも続き、血で道が出た——

振り返ろうとする蜘蛛達は、何故か前から声を聞いた——

「死んでも地面は紅く染まる・・・か」

——カチャッ——

死の音が聞こえた。

百のジロックスパイダーは一瞬で死んだ。声を上げることなく……

第4話

『船長より愛しの娘へ、終わったよー』

『残念、僕です』

『ロイド……今すぐ、そっちに行くから首洗って待ってる』

『理不尽ッすよ!』

ピツと通信を切る。船に向かいながらふと思う。

(あの船の壊れ方で生存者二名か……興味が沸くね、探求者として)

半壊しているのに燃えない二隻の船は何を示しているのか。奇跡か、それとも……

目が覚めると、今度はベッドにいた。

「目醒めMAしたか？」

発音の少し可笑しい声が聞こえた。体がだるく首だけ動かすと、アンテナのついた大きなパソコンのような物を操作する。

活発そうな褐色の肌と落ち着いた青い髪の女性が座っていた。こちらをチラッと見ながら、

「まDA きkかいのちょうせいGア——ブツン……これでどうですか？」

透き通るような青い髪は腰まで伸びており、褐色の肌がさらに髪
の透明さを引き立てる。その子の大きな青い目を見ていると、吸い
込まれそうだった。

「えっと・・・はい、聞こえます?。」

何か言わなければと思い、でた言葉だった。訳がわからないとい
う感じで首を傾ながら言うと、機械を操作するのを止め、こちらに
近づいてきた。

「あつすいませんっ！ 私ったら何も説明しないで・・・えーっと何
から聞きたい?。」

何かを説明しなくてはと思いながらも何を説明していいか分から
ないといった様子のお姉さん・・・何かを聞く・・・！

「さくらは!。」

「えっ！ あなたと一緒にいた女の子は私の横のカーテンの……」

最後まで聞く前に体が動いていた。生きてるさくらに！

「さくらっ!。」

カーテンの向こうには……裸のさくらが着替えていた。

「……………シツレイシマシタ。」

「いえいえ、こちらこそ?。」

「中で着替えてるよって言おうとしたのに」

遅いですと、呟くのと同時に悲鳴が轟いた。

「さて、男の子が女の子にビンタされてスッキリした所で自己紹介をしましょう。私はアクア・ギルスローブ……船長の娘よ」

「俺は……」

「待つて」

さくらが、俺を遮る。

「さっきは余裕がなかったから聞けなかったけど……あなたは本当に浅田勇人なの？」

「俺は俺だよ。俺だってお前が生きているなんて思わなかったんだから」

「えッそれは私のセリフ目の前で死んだのに……」

「死んだのはそっちだろ！」

第5話

「ストップ」

アクアさんが俺達を止める。いつの間にか2人とも立ち上がり、睨みあっていた。

「2人の話を皆で聞いて落ち着いて判断しよ、ねっ」

と言って、腕の機械に話しかけていた。

「なあ、とりあえず久しぶり……」

「ええ、久しぶり……」

ぎこちない挨拶をする……急に壁が出来てしまった。冷静になるとあり得ない事が、起きてるのだから仕方ないか。

神宮さくらは幼馴染だったが、高嶺の花という雰囲気だった。黒髪ポニーテールに眼鏡、成績優秀、運動神経抜群、おまけに美人と来たもんだ、運動だけが取り柄の粗野な男と一緒にいたのは、小学校までだった。

そこからは家が隣だからと近所付き合い程度に抑えた。でも――目の前でディスプレイに頭から食われた時に思った。

俺はさくらの事を護りたいから距離を取ったんだと……つまり、俺はさくらの事が好きだった……でも

「邪魔するぜ」

自動ドアから白髪の男が入って来た。

「「あつ！」」

体が震えた。デイスピアを一撃で切り裂いた男。デイスピアの恐怖を知っているからこそ来る恐怖だった。怖い。怖い。こわ……

「パパにドーン」

「ギャアやられた」

恐怖の対象が小さな女の子に倒された。ポカーンとしているとアクアさんが、

「こらココア、お父さんの邪魔しないの！」

「いいじゃん、お前も来い！ 娘よ！ お前達の愛を俺は受け止めてグオッ！」

白髪の男が女の子を高い高いしている所に蹴りが入った……股間に。

「船長、客人が驚いています。自重して下さい」

「ベルツ、君の行動に驚いているように見えるのですが……」

「気のせいです」

長身の女性は肩まである紫の髪に、少し目つきの悪いけれどもきれいな紫の目をしていた。こっちを見ると、バリバリの営業スマイルで

「私はジェリーベル・ウェントリーよ、よろしく。」

「はっはい！」

第6話

少し声の上擦った。さくらを見るとこっちを睨んでいた……

「? どうした」

「別に、きれいな人だなんて思っただけ……」

もしかして嫉妬? だとしたら少し嬉しい……

「失礼する」

今度は赤髪ツンツンの、またしても長身の男が入って来た。ジェリーベルさんが、170センチくらいだとすると、この人は190センチぐらいは軽くあった……

「元気そうだなによりだ、私のせいで気絶させてしまったから心配だったのだ」

「それより自己紹介をしてあげて」

アクアさんがいうと申し訳なさそうに

「済まない、自己紹介なんて普段やらないものでな……私はスパイラル・アウェイクだ。好きに呼んで構わないが、できればスパイラルで頼む」

「分かりました、スパイラルさん」

怖そうな人だけど丁寧でいい人そうだ……

「って助けてくれたんですか？」

「ああ、2人を両脇に抱いて飛んだのはいいんだが、君達には耐えられない速度だったみたいだね。申し訳ないと思っているよ」

「いえ、とんでもない……助けていただいてありがとうございます」

なるほど、さくらの気持ちがあった。自分の気になる人が異性と話しているのはなんかやだな……

「諸君！ 誰かを忘れていないかね！」

「忘れていないかね」

いつの間にかアクアさんの傍に移動した白髪の男と舌つたらずな少女は大の字になりながら

「ギルスローブラティカ海賊団船長フリードリヒ・ギルスローブ！」

「次女ココア・ギルスローブ！」

「長女……アクア・ギルスローブ……」

アクアさんだけ恥ずかしそう……んっ海賊団？

「ワールドラティカに悪名轟く宇宙海賊といえは我らの事よ！」

「えっとー事よ」

繰り返そうとして分からなくなっている女の子は、アクアさんと同じで活発そうな褐色の肌に透き通るような青い髪が足まである子だった。目も青くアクアさんの吸い込まれるような瞳と違い、無垢なぐらい真っ直ぐな瞳だった。

それにしても……

「親子？」

白髪の男フリードリヒさんを見る。黄色人種っぽい肌に金色の瞳、身長は俺と同じくらいの160センチくらいだろうか、どう見ても父親には見えない。

第7話

「魂の親子だ！」

胸を張り娘を誇るフリードリヒさんに父親じゃないとは言えなかった。

「おっそつだ！ 俺の事はフリードでいいぞ、親睦を深めたいからな！ 全員呼び捨てでもいいぞ」

「そんな！ いきなり失礼ですよ」

「俺もそう思います」

そう言うとショボーンとしてココアちゃんに泣きついていた。この人が本当にデイスピアを一刀両断した男なのか？

と疑問に思いながら俺達も自己紹介していく。そして、

「さて、疑問質問はお互いに多いが君達から事情を説明してもらえるかな？」

スパイラルさんが本題を切りだす。俺達は覚悟を決めて話し出す。地球という星から来た事、デイスピアの襲来、地球からの脱出、気が付いたら宇宙船が墜落していた事、外に出ると蜘蛛型デイスピアに襲われた事まで全て話して分かった事だが、さくらとの話の違いは、どちらが死んでいるのかだけだった。

「つまり、2人とも死んでいるという事か」

「スパイラル……喋るな……バカがばれる」

「なッフリード！ 何を言う！ 2人ともお互いが死んでいると言っているんだぞ！ それとも2人が嘘をついているとでもいうのか！」

「ここにいる2人は？」

「……………バカな」

「スパイラルは置いという船長、アクアはどう思う？」

「確立宇宙説が有力だな」

「確立宇宙説？」

さくらが聞くとフリードさんは、アクアさんに指示を出した。しばらくすると、壁にモニターが表示された。

「まず、この世界……ワールドラティカについて説明しよう」

「ワールドラティカ？ 何ですか、それ」

「やっぱりな、辛い話からしよう……地球という星は、とつくに滅んでいる」

「「エッ……………」」

声が重なる。考えてみれば分かる事だが、地球はディスピアによって半壊していた。しかし、本当に滅んだと聞くと血が引いていく

気がした。

「ワールドティカ創生前の出来事となり、約1万年クロノス前となる」

「へっ？」

分からない言葉ばかりで話が進まない。

「よし……勇人、さくら、スパイラル、ココアに教えるワールドティカの基本知識！先生は皆の船長、フリードと……」

「まず、これを見て」

第8話

スパイラルに首を掴まれているフリードさんを置いて、アクアさんがモニターを進めていきながら話し始める。

「ワールドラティカ誕生の瞬間は、ラティカという神が世界を繋げた事が始まりだったの」

（俺の初めての印象をバカにしようとするな！）

「ラティカは始まりの神と称され、原初の神戦と言われる戦いの勝者とされているの」

「神って神様の事ですか」

（クールな美形なんておいしいポジションに置いておくか、バーカ。お前もいじられキャラに落としてやる）

「神は称号っていうのかな？ベルお願いしていい？」

「ええ、でもラティカの恩恵についてから先に説明しましょう」

（子供か！だいたいフリード貴様は！）

（あっラティカの恩恵について説明してってアクアが……）

「えーっと、能力を使えるようになる紋章の事だ」

「聞いてないわ」

「……………バカな」

「ぎゃッはッはッはッはッは。騙されてやんの！ ひっひ

っひっひっひ……」

ぶちつと音と共に声が消える。ベルさんを見る、どこから出したのか鞭を持って……

「人が真剣に説明してるつてのにピーピー後ろで騒ぎやがって、殺されてえのかああああああ！」

男2人が高速で逃げる。ベルさんが怒った瞬間、意識が飛ぶ程の重圧がかかった……女性が怒るこうなるのか？

「今のがラティカの恩恵の効力なの。一つ一つ説明してね、ベル」

「慣れてますね……アクアさん」

「まあね、この子も起きないし」

アクアさんの膝の上でココアちゃんが寝ていた。ベルさんが、やつと落ち着いて……

「さっきは失礼しました。取り乱してしまっ……」

「いえ、でも体がすごく重くて」

「ごめんなさい……ラティカの恩恵の力は星や宇宙の力を受ける事なの」

「この映像を見て」

壁のモニターに、赤い円の中に剣が盾を貫き空を割いている映像

が映された。

「これが、お父さんのラティカルーン。ラティカルーンというのは恩恵を受ける為の受け皿のようなもののな」

「さっきの重圧は恩恵の一つなの・・重さを司る星のカグラビティルーン、星の力をエネルギーに変えて放出・コントロールするエネルギーイルーン、個別の能力の発現によるアビリティルーンの3つがラティカの恩恵と言われるものよ」

「だから、デイスピアを殺せたのか……」

第9話

待てよ……仮に、ここを未来とすると未来からの侵略行為だったのか？デイスピアは……

「悪いけど考えるのは後にして、歴史と神について一気に説明しちゃうからね」

「分かり……ました」

考えを打ち切られたが、ベルさんの言う事も最もだった。隣を見ると、さくらは真剣な顔していた。ベルさんの話を聞きながら考える姿は孤高の優等生そのものだった。

「じゃあ、話を神に戻すと原初の神戦で勝ったラティカは力を分散したの……それが

ラティカの恩恵と言われ、始まりの神と言われる要因ね。そしてラティカの意志を受け継ぐ者を、人の身にて神の力を持つ者を神と呼ぶ事にした。神託とされる特殊なラティカルーンを持っていて、その色は金色のルーンで統一されている。ふうっ少し休憩しましうか？」

「すみません……ベルさんに無理させてしまつて……」

さくらが気遣うとベルさんは笑いながら

「気にしないで……あなた達の何倍も疲れる人を相手にしてるから……アクアも休んだら？ 言語解析、文明発掘は後でもできるでしょう」

「そうなんですけど……この子を起こすわけにはいかないから……」

アキラさん……さつきから静かだと思ったら、そんな事をやってたのか……

「どんな事やってるんです？」

大きいパソコンを覗く……パソコンでいうところのウィンドウが目に見えないスピードで現れては消えていた。字が読めないどころの話ではない、目で追えないのだ。

「目がチカチカするから見ない方がいいよー」

「今何をしてるんですか？」

「映像の記録とアーカイブ検索、過去の事例検証や今日の報告書作成に……」

「あのっ現在やってることでもいいんで」

「全部やってるのよ……その子は」

「いやっ無理でしょ！ 同時に複数の事なんて」

「さっき話した能力を使ってるの……ビジョンチェンジと呼ばれる能力をね」

「ビジョンチェンジ？」

「私が今見た映像を切り取って保存できるの……私の頭の中と画面をリンクさせてる装置なの。新しい情報は一番上に表示して記憶……それを頭に入っている画像から必要な者を集めて、編集といった所ね」

????? 訳が分からない……さくらは……

「つまり、見た映像を写真にして脳内に保管し、それを今見やすいリストにおこしているんですね」

さすがだな……

「そんな感じ、相棒のこの子はサブブレインリスター……私の為に作られたサブアビリティアイテムよ」

「サブアビリティアイテム？ 名前から察すると能力補助って事ですか？」

第10話

「そういう事、結構便利だから皆一つは持つてるわね」

「私は補助しているとはいえ、一日で10人分仕事を終わらせるアクアが怖いわ……」

ちょっとひきつって言うベルさん、10人分・それはすごいと感心していると、ピーと甲高い音がした。すばやく腕の機械を操作し、顔に近づけると

『ベル！至急デッキに来てくれ！流れ星を発見した、これより酸素供給を始める』

「了解しました。アクアはどうします？」

『その子達から目を離すわけにはいかないから……部屋で待機を娘達に伝えてくれ』

プツツと音で声が消える。今のは船長の声？

「アクア分かった？」

「はい、任せてください」

そう言つとベルさんは急いで出ていく。さっきまでケンカしてたのと思いいながら見送ると、アクアさんはモニターに黒い画面を出した。

「今私達はあなた達の居た星から神の星レイドヘブンに移動中なの」
へえーよく分からないけど星から星に移動中なのか……！」

「まさか……ここ宇宙！」

「えっウソ！」

さくらも気付いたみたいだ快適空間だから分からなかった……

「ちなみにこの部屋から出たら死にます」

「「死！」」

「ラテイカに加護を受けてない人が高速移動中の宇宙船に乗るのは、とても危険の事なの……でも、神様のいる星に行かないと加護の処置ができないから医務室にグラビティルーンを船長が丁寧にコントロールして、維持させるサブアビリティアイテムを置いて安全地帯を作ってるの」

「じゃあ……ここから出たら本当に……死にますか」

「死ぬわ」

笑顔で脅された……さくらもひきつつてる。ドアの向こうは死の世界ってか……

「じゃあ、モニターに映ってるのは宇宙？」

「そういう事になるわ……そして、これが流れ星ね」

「流れ星を宇宙で見るとどうなるんですか？」

画面に、それは綺麗で巨大なクラゲが浮いていた。

「「クラゲだああああ」」

「よく知っているわね、ゲンデルクラゲ……傘に大量の酸素を生成できる事からエアースターや流れ星の異名を持っているの」

「驚きのスルー！」

「さらに、大きさにも規定があって直径800mを超えていないと酸素を取ってはいけないの……ラティカ生物保護法に定められているの」

この人……スルースキルが高いみたいだ。待てよ、確かさくらは

……

第11話

「かわいい」

超うつとりしてる。ヘンテコ生物好きだもんな……さくらは……ゲンデルクラゲは青い光に包まれており、宇宙に神秘的な光をもたらしていた。

ゆらゆらしているクラゲの周りで円状の波が立った。

「宇宙に波？」

「あれは流れ星と対話する為に音が伝わるようにフィールドを作っているの」

「クラゲと会話出来るんですか？」

「あなた達とも会話してるでしょ」

と言いながら腕につけている機械を見せる。

「これはマルチトランサーといって言語変換・通信・辞書・歴史書など必要な機能を、全てダウンロードする事で使用できるワールドラティカ最高峰の発明品よ」

「それだけの機能を、そこまで小型にしているんですか！」

さくらの疑問は最も……携帯を腕につけているのかと思う程の小さい機械に、なんでも入ると聞いたら誰でも驚くだろう。

「今この部屋は、マルチトランサーボックスを置いてあるから会話ができるの。ボックスの調整をしてたから最初聞き取りづらかったと思うけど」

「最初の雑音はそういう事だったんですね」

納得すると隣の機械から二つのマルチトランサーを取り出した。

「調整は終わったからつけてみる？」

「いいんですか？」

俺は唾を呑んだ、そんな凄そうな機械をいる？ と聞かれて戸惑わない人間なんて……

「結構軽いですね」

「つておい！ 軽いのはお前の態度だ！」

「これがないと言葉が分からないのよ？ 今は、おそらくマルチトランサーの入っていた機械のおかげで言葉が通じるだけよ。だから素直に受け取るのが正解ですよね？」

「大当たり、優秀で助かるわ」

くそっこれだから優等生は……愚痴りながらつける。本当に思ったより軽いな……マルチトランサーは大きなダイヤルが手首の方についており、ダイヤルの真ん中には赤いスイッチがあった。それ以外の表面は画面になっていた。

「まだ本来の機能は使えないから起動はしないの……ごめんね」

「起動しなくても使えるんですか？」

「今それは、ラティカの恩恵と同じく受け皿になっているの、お父さんのトランサーと同期して常時力を分けてもらっているの」

「フリードさんは大丈夫なんですか」

漫画で在り来たりだが、力を分けると本人の負荷がかかるはず…

…

「私の所有ラティカの数億倍持つてるから大丈夫」

第12話

「桁可笑しくありませんか？」

「お父さんはレベルが違うから……」

困った笑みを浮かべるアクアさん……どうやら冗談でもないらしい。

「それより酸素供給が始まるよ、ほらっ」

画面を見ると生身でゲンデルクラゲに近づいている人類の姿がそこにあった。

「ツツコミどころが多すぎる……」

「ちなみに、スパイラルさんのチームだから仕事の速さは保障するわ」

「そこじゃなくて！ 宇宙空間で生身っておかしいでしょ！」

「エアーマウスピースにラティカスーツ、この二つがあれば宇宙空間でも大丈夫」

「常識が通用しないわね……」

さくらが呆れている頃……ギルスローブ宇宙海賊団 メインデッキ司令部

『これより酸素供給を開始する、ゲンデルに許可をもらってほしい』

「了解、ゲンデルクラゲ言語周波数を発信——了承取りました。
スパイラルさん酸素供給開始して下さい」

『酸素チューブ接続……ジョイント完了、酸素供給開始！　これより足の清掃に入る』

「了解、宇宙魚の巣は壊さないようにとの事です……気をつけてくださいね」

『分かっている』

「ロイド、順調そう？」

「ベル姉さん、今の所はって感じっすね……船長は？」

「まだ集中しているみたい」

「相変わらず、豪快なのか細かいのか分からないですね」

「止まってる時の船は無防備だから……」

ベルはそう言いながら後ろの船長席を見る。そこには、先程までの男はいなかった。ギルスローブ宇宙海賊団船長がいた。

「……………」

無言でイヤホンで音を探り、モニターを見て危険はないか徹底的

に調べているのである。音の伝わらない世界で音フィールドをつくる技術はソニッククオリアフィールドと言われ、認識できないものを認識する事をクオリアの取得と定義した。

ラティカの加護を受けているものが発生させる力の流れを読み取る感覚から派生したものだだったが、呼び名がついたのはクオリアに関する技術の開発の為だったと言われている。

だが人間の聴力では限界があり、普通は半径1kmが限界だ。しかし

「聴界フィールド20km……化け物ですよね」

「限界突破能力に不可能はない……船長の口癖よ」

フリードの能力に常識は通用しない……相手になった者が必ず口にする言葉だ。

第13話

船長は絶対的な強さを持っている——だから船長なのだ。

「黙っていれば、かつこいいのよね……」

つぶやくベルは少し顔赤かった。

「ベル姉さんもいい加減素直になつたらどうです?」

「はっ!? 何がよ」

ニヤニヤしながらロイドは周りを見ると皆頷いていた。

「ベル姉さんが船長好きな事は、船長以外全員知ってますよ」

「なっ! はっ! むっ!」

変な声がでてあわてるベル……

「何言ってるのっ確かにフリードとは長い付き合いよ、あいつの世話とか焼いてるけど好きって……そんなバカなこと……でも、あいつはそういうのに興味がないし……ねえ? ああでも、嫌いじゃないわよ……尊敬できるし、護ってくれるし、誰よりも長い付き合いだし……でもでも」

周りは作業に戻っていた。普段は冷静な補佐官なのだが…船長の事が本当は好きでそこを突かれると惚気始める。

「船長の前でやれよ」

ロイドは百年を超える恋する乙女に溜息ついた。その時だった――

「ベル！ スクエア、レフト1500：ダウン1900の位置に進路をこつちに変えた大型生物あり、詳細情報を！ ロイドは船長席リフトアップ！ 他の者はスパイラルのサポートをしろ」

スクエアとは船を中心とし、宇宙を正方形とした考え方である。つまり左方向15km、下方向19kmに敵性があるという事だ。ベルは慌てて自分の席に座り、調べ始める。

「速い！」

観測できる距離に入った生物は確実に迫っていた。だが、正体が分からない！

「遮蔽完了！ リフトアップ」

いつの間にか船長席をクリアなガラスの様な物が覆い、席が上昇していく。その先は――

「船長！ ラティカスーツは！」

「いらん」

そう言つと本当の生身で単身宇宙に飛び出した。宇宙を走る……何も道もないのに男は進んでいく。手にはガムのようなものを持っていた。

「さすがにエアークラムは口にいれるか」

『当たり前です!』

ベルの声が体に伝わる。体にラティカの力を調整して宇宙空間での移動と生存を可能にしていた。つまりは重力を足にぶつけて歩いているのである。

「反応が遅かったお前が悪い……考え事か？」

第14話

「……別にそんなんじゃないです……すいません」

「わかればいい……それより目標を捕捉した、映像を送る」

宇宙という黒に溶け込んだ岩のような巨大な物体があった。

「——デカイ！」

『目標の検索結果でした！ タイレイレンギョです。ラティカ質量6300G最大級クラスです！』

ラティカ質量とは宇宙空間でも地上でも使える質量で、簡単に言う**う**と強さのことである。

なぜ？ と思うだろうが、ラティカの加護を受けている者にとって体重は変えられるものであるからだ。

しかし、ラティカ所有量は測れる事を発見したジート博士の提唱したGという単位が

決められ、重さという定義は重強で決められるようになった。

普通の人が100Gとすると63倍の強さをもつタイレイレンギョは、フリードの接近から警戒を高めていた……本能的に感じていた……

強い

と、黒い体を大きく振るうと体についていた隕石が高速で放たれる——高速回転で放たれる隕石は一撃必殺と言っても過言ではないが、

「ふっ！」

と、一閃から放たれる斬撃は隕石を全て両断する。しかし、目の前にタイレイレンギョが移動していた！

「反動をつけたかっただけかよ！」

攻撃と移動が重なった動きに、驚くと同時に突進される……刀で弾くように軌道を逸らす。やっと全体像が見えてきた……例えるならウミヘビに、黒や銀の鉱石がくっついていてるような姿だった。

「硬いな！　だが……刃轟！」

刀を鉱石につけて殴る……それだけで衝撃が轟いた。

「MYAAAAA」

悲鳴？　違う——これは！　慌てて距離を取った瞬間——爆発した！

「纏った隕石を弾く事で、周りの敵を一掃する……なるほど理にかかった攻撃だな。しかし、刃轟は衝撃波の波を作る！　伊達に研究してねえぞ！」

剥がれた隕石の先には、青白いブレードのような体で蛇の様なタイレイレンギョがいた。タイレイレンギョは焦っていた……ここまで手ごわいとは！　と——

しかし、ここで獲物を逃がしては自分が死んでしまう！

「MYAIIII」

突進する——ブレードにラティカルーンを集め——剣となる！
そして——

「温いわぁぁ」

空間が歪む程の斬撃と剣となりし生物がぶつかる！
斬！

第15話

音が響いた気がした……タイレイレンギョが真つ二つになった。これが、この世界の戦……強いものが勝つ世界であった。ポカーンとしていた……何これ？ 私、浅田勇人は何がなんだかわからなかった。

「パパ！すごい」

と起きたココアちゃんが足元で騒いでいる……画面では『酸素供給完了これより帰艦する』や『タイレイレンギョ撃破帰るよー』

といった声と共に怪物達が帰ってくる――

「お父さん……無茶すぎよ、唯でさえ力分けているのに」

「全力じゃないんですか？」

「パパが本気だしたら星も斬っちゃうんだから！」

「それは言い過ぎよ……多分」

どんな人間だ！ 呆然とするしかなかった……

「さて、急な信号をキャッチして後先考えずに航行した分は取り返した！ 船の節約航行は解除……万事解決」

「疲れるから節約航行はご免ね」

「アクア君！ 訓練が足らんよ……俺を見る！ 2人分＋戦闘＋全員と同じくらいの負荷なのにハイパーテンション」

「パパはちよつと元気すぎだよー私も疲れるからほとんど寝てたよー」

「寝る子は育つぞ！ わが娘よ！ パパみたいになるんだぞ」

目の前には先程まで宇宙空間にいた男達がいた。そしてフリードさんは、またパパに戻っていた……何者なんだこの人は……

「お父さん……そろそろ説明の続きを……ワールドラティカの神託を受けし、神まで話したから」

「OK！ 神託を得たものは神に等しき力を奮えるのだが、その中でも時の神クロノスが有名だな」

「先程でた言葉ですね……」

「そうだ、クロノスは第一次ワールドラティカ戦争を終結させた英雄だ」

「お父さんの説明を補足すると第一次ワールドラティカ戦争は色々な世界が、ラティカによって繋がれ意図を知らせず力分散させて自分は消えちゃったものだから……誰もが戸惑った結果、世界の王になろうと繋がった世界全てが戦いの渦に巻き込まれたの」

感心しながら理解しようとしているのだが、スパイラルさん……ココアちゃんと遊んじゃって本当にバ……頭悪いのか……

「スパイラルは、どうして話に参加しないの？」

「船長にココアの相手をしてくれと頼まれてな。なぜだか、会話に参加すると言われたよ」

「かわいそうに……私と理解力が同レベルなんだね」

第16話

「……………バカな」

泣けてくる……………

「後ろは気にするな、つまりはルールが何もなかったんだ。神は世界だけ作って放棄したと言われるぐらい酷い戦いだっただけ……そして、戦いによりラティカの力を理解し始めた時、人は宇宙での戦闘を覚えた。無法地帯とはこの事と言われる程当時は酷かったらしい……だが、神託者達が立ち上がった瞬間世界の戦争は次々と静まっていった。」

「神々の誕生と世界の王をラティカとする神法ができた資料がこつちね」

ベルさんが透明な板を渡す……そこには3人の男が光を掲げている絵だった。

「時の神クロノス、法の神ワイリス、宙の神リエゴリオの3神が世界のルールを決めたんだ。ラティカを中心とした世界ルールの構成を考えた3人は力と知恵で世界に広げ、時間軸をクロノス時間とした。」

「ちゅうの神って何ですか？時とか法とかならわかるんですけど……」

「宙の神とは、史上最強と云われる神だな……なんでも、どこでも宇宙空間の様にして天を無くし、空間の定義を失わせた天地葬纏

の使い手だったらしい……戦ってみたいよな」

史上最強か……この世界の最強って、一体どれくらい強いのだろうか……

「よく言いわ、最強の一人に数えられてくせに……船長は、自分がどれほど理解してなさすぎなのよ……まったく」

溜め息をつく、ベルさん・苦勞しているんだろうな。

「最強の一人なんですか？ フリードさんは」

「おう、ラティカの3戦士の一人らしいぞ……俺は。ラティカって頭に付くとワールドラティカで認められたって意味らしいぞ」

自覚ないにも程があるな……すると、さくらが

「話を戻して下さい！ やっとクロノス時間についての説明に入っただんですから！」

「怒るなよー、まだレイドヘブンには着かないだから時間はたっぷりあるから……なあ、アクア？」

「お父さんは配慮が無さすぎなの！ 故郷を失って、焦る気持ちは理解してあげてよ」

「すつすまん」

慌てて謝るフリードさん……よくは分からないが、アクアさんは何か共感できるものを持っているようだった。

「クロノスの決めた時間の定義は……多くの星で使われていた一日の時間は24時間が多かった。だが、星の距離から時差が生まれたことからクロノス時計という定義を求めないとワールドラティカの時間が表示できなかった」

ベルさんが時計のような物を持ってきた

「これが、クロノス時計……右の時計が1カ月クロノス表記の時計、左の時計がリセットタイマー押した時間から24時間を1クロノスとしたクロノス時間の表記を示しているの。」

第17話

「つまりだ……24時間を1クロノスとし、24クロノスを1月クロノス……24クロノスを一年クロノスとしたクロノスの24時間法で世界を定義した」

???? 分からないと桜を見ると

「私達の世界では24時間を一日とするでしょ？ それと同じで、この世界では一カ月が24日なの……そして24カ月が1年になるの……分かる？」

「なんとなくは……って事は！一万年クロノス前っていうのは24万年前って事か！」

「この世界は24万後の世界ってことになるのね……」

そんな馬鹿な……しかしワールドテイカという世界ではそうなるのか……

「自己整理はついたか？ 次行くぞ……1万年クロノス前に滅んだ文明をロスト・ヒストリと呼ぶ、名だけしか分からない隠された歴史さ……」

寂しそつにいうフリードさん……では、俺達は？

「名だけでも伝わるといふ事は生き残りがいたんですよね」

「さくらちゃん……するどいね、しかし君達のタイプは珍しいんだ。」

ラティカの世界を繋げた力に干渉を受けなかった特殊な力を、持たない世界からイザナイによって召還されたもの達が伝えた星なんだ」

「地球人が他にもいるんですか!？」

衝撃だった……生き残りがいる!それが嬉しかった。

「ああ、発見されているだけで1万人はいたらしいな地球人を名乗った人は……つまり、イザナイは、この世界とロスト・ヒストリを繋ぐ穴なんだな……ブラックホールとかいう名称がついていたらしいお前達の所では」

「地球を救う事も出来るかもな……そのイザナイ? を使えば……なんだ希望はあるじゃねえか……」

そこで、さくらの顔が厳しいのが分かった……? どうして……

「どうして……」

「何が?」

「どうして過去形なんですか! じらさないで教えてください!」

「決まってるだろう……自分達が、どれだけ運がよかったか……気づいてるはずだぞ優等生のさくらちゃん。ラティカの加護を受けに行けるなんて奇跡にも等しい状況だぞ」

そうだ……宇宙の移動は人類の夢だが、それを人体強化と技術力で攻略している。ワールドラティカの人達……地球人は生きられるのか?

「落ちた星も、たまたま君達に耐えられ気候だっただけだ・・・色んな星があるからな、ラティカ11Gなんて星は君達のいた星の10倍の重力がかかる。」

聞けば聞くほど……どれだけ幸運だったかが分かる

「住人に殺されたり、研究者にサンプルとして解剖されたり、脳だけ読み取って資料にさせてたり……」

さくらの顔が青白くなっていく……そういえば、この人達は……

第18話

「何が言いたいんですか・・・宇宙海賊さん」

強く前に出ながら言う、さくらを守るために・・・フリードさんを見る。金色の瞳に狂気の色を帯びていた・・・まるで、俺とフリードさんしかいないようだ。生きている心地がしない・・・でも

「ちっぽけだろうと思いつりになると思うなよ」

小さな小さな少年は、自分の背中で震えている少女を守るために、
獣になる・・・しかし、

目の前の怪物は静かに手を伸ばした・・・

「宇宙海賊さんの目的が知りたいか？小僧」

頭を軽く掴まれた・・・それだけで身震いした。

「1つ教えてやろう・・・偽善で俺達は動かない・・・つまり、目的があるわけだ。それを自分で考えてみる・・・分かったか？」

喉が渴く・・・怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い
怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い
怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い

「なーんてな！びびったか？」

「お父さん！性格悪すぎ！」

アクアさんが怒鳴る・・・やっと周りが見えてきた。すると、さくらの震えていた。

「大丈夫か？」

聞くが声が出ないらしく、頷くだけだった。

「船長・・・やり過ぎです。つまり、私達に出会えた事がどれだけ幸運かを教えるのに、そこまでする必要性はないでしょう」

ベルさんもたしなめる・・・が、

「喧嘩を売られたから買ったただけだぜ・・・こっちは助けてやったのに喧嘩腰なんだぜ？世間って奴を教えてやってもいいだろがよ」

「パパ！」

フリードさんがビクツとなった・・・少女が仁王立ちして睨んでいた。

「お説教です・・・こっちに来なさい！」

「はい」

トボトボとココアちゃんの方に行くフリードさんだった。

「ごめんなさいね・・・船長は喧嘩腰だから、気にしないで」

ベルさんが、言う言葉が耳に入ってこない・・・フリードさんが分

からない・・・戦闘時と非戦闘時の陽気なフリードさん・・・どっちが本性なんだろう・・・。。。。。。
しばらく、休み・・・さくらが回復してからフリードさんが帰ってきた。

「調子に乗ってすみませんでした・・・これでいいココアちゃん？」

「言わされてみたいにしないの！誠意が足りないの！パパは！」

「いえ・・・それよりさっきの話は本当なんですか？」

「残念だけど船長の言う通りよ・・・地球という世界とは何から何まで違うらしいから」

さくらの質問を当然のようにいうベルさんは俺達を気遣ってか、辛そうな顔をしていた。

スパイラルさんに至っては、隅で丸まっていた・・・

第19話

「スパイラルさんは何をしているんですか？」

「気にするな・・・話についていけないだけだ」

イケメンの頭悪い人って不憫だな・・・

「ラティカやクロノスについて理解したか？なら確立性宇宙論について語ろう・・・」

「最初に言ってた、俺とさくらがお互いに死んだのを見ているのに生きている事についてですね」

「そつだ・・・クロノスは宇宙の時間は可能性の塊だと言ったらしい」

「可能性の塊？」

さくらが聞き返すと、アクアさんがモニターを表示する・・・

「この世界は広過ぎるの・・・だから、時間軸のずれで無限に世界ができる」と定義したの・・・ある人は予知夢で未来を見た人、ある人は時間が止まったように見えたという話もあるの」

「そして、地球人で死んだはずの人間が違う場所で死体で発見された・・・どうやら外部からワールドラティカに入った者は時間に干渉してしまうようなの」

「ようするにだ・・・今回はワールドテイカから見た世界地球のありとあらゆる確立が結ばれた場所が、あの地だったわけだ・・・これは憶測だが・・・あの地に地球があっただと思うぞ」

壮大すぎて分らない・・・しかし、宇宙の時間が・・・訳が分からねえよ

「まあ、難しく考えるな！二人とも生きてて良かった・・・それでいいだろ」

「そう・・・ですね」

さくらは、俺の顔を見ながら微笑むと

「生きててくれて嬉しいよ・・・勇君」

「俺もだよ・・・さくら」

本当に嬉しい・・・奇跡でも何でもいいありがとう神様

『船長・・・レイドヘブン入星審査ボーダーラインにそろそろ着きますので、こちらへおねがいします』

若い男の声がした・・・フリードさんは立ち上がると

「さて、行ってくるか・・・お前らは、娘達やこいつらと一緒に居てくれ」

「了解」

フリードさんは出て行った・・・

「にゆうせい審査ってなんですか？」

「星に入る時に必要なパスを通信で送る審査ラインの事よ・・・でもレイドヘブンは入星審査が厳しいから海賊の私達は本当は入れないけどね」

「えっ！じゃあどうするんですか？」

「神様もこの世界では人って事よ・・・私達みたいなのを使わなきゃいけない時もあるってことよ」

第20話

その頃フリードは・・・

「エルディアーナ緊急コード9874を申請・・・入星の許可を求める」

『コードの確認を致しますのでエルヘブン回線90を維持しつつ、お待ちください』

「了解」

「姫様は了承しますかね？」

「あいつは未来が見えるんだ・・・あいつらに価値がなかったら追いつ返されるし、価値があるなら・・・」

言いかけている途中で通信が入る

「緊急コード9874申請受理されました。レイドヘブン星エルディアーナ神国への入星入国を許可します」

「すぐに会いたがるはずだっとな」

苦笑しながら進路をエルディアーナ神国へ向けた・・・

小鳥さえずる庭で、紅茶を飲む・・・そんな絵本の中の世界があった。未来を詠む神エルディアーナは、そんな風景の中で来るであろう友人と少年少女を待っていた・・・

「エルディアーナ様・・・失礼いたします」

少し怒った様子で入ってきた年配の男は神官の一人モルワスである。

「あら・・・モルワスどうかして？」

「海賊を国に入れた件です！」

モルワスは要件を切り出す・・・この神には余計な説明も会話も必要ないからである・・・

「海賊ではありません・・・表向きはギルスローブ貿易会社ですよ」

ギルスローブ貿易会社・・・それが、ワールドラティカ最大の海賊の表向きの名前である。世界のパイプラインとして認知されているギルスローブ貿易会社は、力なきものに力を与える事を目的としているが、その目的の為に戦争を起こしたり・・・戦争を止めたりと色々な顔を持ったため敵も多く・・・味方も多い、それが、フリード・ギルスローブの海賊だった。

「奴らの今迄を全ては否定しません。むしろ、立派な義賊と言えるでしょう・・・しかし、賊は賊！神の国に入れるべき連中ではないでしょう・・・しかも、緊急コードを渡すなんて考えられません！」

「必要な未来です」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

その言葉で、モルワスは黙った・・・『未来』という言葉の重さは、神官クラスなら必要以上に知っている・・・だから

「そんなにフリードはワールドラティカの未来に必要ですか・・・」
と問うしかなかった・・・

「私が必要な未来以外を選択した事がありますか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・失礼しました、エルディアーナ様」

第21話

一礼し、引き返すモルワス・・・入れ違いに女性が入り、

「エルディアーナ様・・・緊急の謁見の申し込みがありましたギルスローブ様が謁見の間に到着致しました」

「今行くわ」

モルワスは間違えていないが、この国では未来こそが正義そして未来の見える者・・・

神エルディアーナは絶対の正義なのだった・・・

「いらつしゃい・・・フリード」

「エルディアーナ様・・・本日は急な謁見を受けて戴き至極の幸せ・・・」

真面目なフリードさんにキョトンとしながらカプセルから見ていた。

まるで虫籠のようなカプセルに入れられていた俺達は光が上から降り注ぎ、

金の柱と白い壁の映える聖堂のような所にいた。緑の植物が綺麗に並べられており、

光を浴びて風もないのに生き生きしていた・・・しかし、それ以上に目立つのは目の前の女性だろう。

黄金と言っても過言ではない髪・・・白い肌・・・そして赤い瞳・・・何故だろう見られている・・・

目の前にいて見られているのだから当たり前だが、もっと違うモノ

を見られている気がした。

「フリード・・・上辺だけの挨拶はいらないといったはずですよ？忘れましたか」

「礼儀つてもんがあんだろがよ・・・まあいいや、どこまで理解してるか分からねえが・・・面白いモノを拾ったからお言葉を頂戴しにきたって訳だ」

「恩恵の準備はできております。それに神殿内は地球人でも大丈夫でしょう・・・」

何かも理解している・・・そんな雰囲気で答える女性にフリードさんは少し不機嫌そうに

「なるほど・・・ベル・・・開けてやれ」

「はい」

ベルさんが触ると目の前が開いた・・・

「えっと・・・どうすれば」

「こちらへ」

宮殿に響きわたる静かでありながら意思のある声に導かれるように、女性に近づく・・・

「お名前は？」

「おつ俺は！浅田勇人つていいいます！」

「私は神宮さくら・・・です」

「そう・・・私は未来を見る者エルディアーナです。神として崇められています、そこまで畏まらなくてよろしいのですよ」

無理だ・・・あのさくらでさえ緊張しきっているのに・・・神様だろ？緊張するなって方が

「はい・・・笑って笑って」

そついうと俺の頬を引っ張った・・・って

「いはあいへほふ・・・なにほ」

「えっ？へっ？何をされているんですか!？」

第22話

「スキンシップよ、あなたも・・・ほらっ」

次はさくらが犠牲になった・・・緊張は解けたけど・・・後ろを見るとフリードさんが笑いながら手を振っていた。

「コミュニケーションはこれくらいにして本題に入りましょう・・・ラティカの恩恵を授けなければ何もできませんからね」

「ラティカの恩恵ってどう授けるのですか？」

「ほとんどの人が生まれて時から持っていますが、稀に授からずに降りてきてしまった人もいます・・・」

そのような時の授け方として、神の儀式というものが一般的ですね」

エルディアーナさんが振り返ると、壁が無くなり・・・道ができた。

「ついてきて下さい・・・これより神託を授ける儀を行います。心の準備はよろしいですか」

「心の準備・・・ですか」

「体の一部に紋章を刻むこと・・・地球人という存在から外れる事・・・説明を受けたのならわかるはずですよ」

「――」

呼吸が止まるかと思った・・・そうか・・・流れで、ここまで来てしまったが俺達はフリードさん達と同じく怪物の如き力をふるえるものになるうとしているのか・・・

「勇君・・・」

いざという時だけ俺に頼りやがって・・・他に生きる方法がねえなら選ぶしかねえだろ！

「お願いします」

「いいのね？」

「文句は考える時間をくれなかった・・・後ろの人達に言います・・・まずは自分で生きられる程度にはなりたいです」

「そう・・・さくらさんもいい？」

「はいっ」

「結構・・・決断が早くて助かるわ」

手を横に伸ばすと杖が現れた・・・そして、地面に円を描いていく。

「我、ここに御魂を受けたもう、赦したまわれば下りたまへ」

金の光が円に下り、円を通じて杖に灯がとる。

「円の中に入ったら、利き手を差し出して・・・生まれながらに持っている人は個人個人の場所に紋章が
きざまれているのだけど、あなた達みたいなタイプは手の甲にしか
きざめないの・・・いいわよね？」

「はいっ」

と答えると、円の中に入る・・・右手を差し出すと手の甲に杖が当たった。

「熱！」

「我慢」

最初から言ってくれよと思いながらもジッとしていると杖が離された・・・手の甲に白い円が刻まれた。

第23話

「円の中で自分をイメージして・・・あなたの力のイメージを」

言われるがままに目を閉じ、自分をイメージする。すると・・・円の中に入っていく自分が見えた・・・俺は立ち尽くしている・・・なぜ？

周りを見ると血が爆発していた。ここはどこだ？ 思い、歩く・・・柱が見えた・・・6本あった。

エネルギーの放流によりできた柱は、何かを包むように立っていた・・・何があるのだろうか？

隙間から下を覗き込む・・・

死、暴走、発狂、狂気、嗤え、楽しめ、壊せ、ありとあらゆる死を、憎しみを、恐怖を、

「う け い れ ろ」

「ひっあっあああうあああ」

「?! フリード! この子をメディカルに!」

「ツツわかった!」

俺は最後に獣の慟哭を聞いた気がした・・・

目を開けた・・・おじさんが、顔を覗いていた。

「大丈夫かね? 倒れたという事で君を見ているように言われたのだが」

「・・・近いですね」

「見ているからな」

「座りながらも見れると思うのですが・・・」

「ふぬう・・・座ろう」

やっと目の前が開けた・・・お姫様が眠りそうな豪華なベッドに寝かされていたのだが、目の前のおじさんが瞬きせずに見ているのが気になり過ぎる！

「あのツ！ 他の人達は？」

「夜なので・・・皆様心配しながらも休んでおります。あなたは約10時間寝ておりました」

「！ そんなに寝てたんですか・・・」

「ふぬう」

この人・・・色々濃いな。しかし、髪の毛も髭も顎鬚も何故かクルリとカールしており色は、白で統一されている。そして白主体の神父さんの格好をしているので謎の威圧感を持っていた・・・そして、目の動きが両生類的でくつきりしていた。

「ところで暗いという事は、夜だと思うのですが・・・あなたは寝ないのですか？」

「ご心配なされるな．．私は神官である」

「．．．．．そうですか」

神官つてすごいなーと思うしかなかった。すると、扉が開いてフリードさんが入って．．

「ふぬうはあああ」

おじさんが凄いスピードで迫り扉が爆発した。

「うわああ！フリードさああん」

煙の中に2人の影があった。

第24話

「やるな！モケッド・コロウ！」

「まだまだよ！若造に止められる内はな！」

肩を組んで語り合っていた・・・この世界のあいさつは分らん・・・
・というかモケッド・コロウって名前なのか、このおじさん・・・
面白い名前だな・・・

「このボンクラ共！黙れ！」

ベルさんが2人を蹴り飛ばす！フリードは回避した。モケッド・
コロウは蹴り攻撃を食らった・・・しかし、モケッド・コロウにダ
メージはないようだ・・・

「突っ込ませろ！変人共！」

足を痛そうにするベルさんをH A H A H Aと笑う男2人・・・訳が
分からない

「あのっ！この人は？」

「ふぬう・・・自己紹介がまだでしたな、私はこの度フリードの船に
同乗することになった神官モケッド・コロウである！以後お見知り
おきを」

同乗？　どうなっているのかとフリードを見ると、笑いながら

「お前達に神託を刻んだ責任としてお目付け役がついただけだよ・こいつは、こう見えても位の高い人物だ。信用もできるしな」

「信用に答えましょう・・ところで出航準備はできましたか？」

「おう！後は・・勇人を詰め込めれば出航だ」

「では！」

そついうと俺を抱えた・・つて、まさか！

「ゆくぞ！」

「またツこのツパターンかよおお」

俺の悲鳴だけが部屋に残った。

「神託があるから死にはしねえよ・・たぶん」

気を失わないせいで、逆に辛いつて・・あれ？ 意識を持てる？

「けど！怖えええ」

「慣れるのです」

「慣れられるか！」

と叫んでる頃、エルディアーナは神殿の最上部にいた・・夜の帳が落ちていても光が満ちていた。

月のない世界は夜を一段と暗くしているのに、エルディアーナの周

りだけ明るのは神の力が・・・それとも能力か

「エルディアーナ様・・・失礼いたします」

モルワスが後ろに現れると・・・視線すら向けずに、当然のように嫌悪感をだして

「何か用？」

「・・・そこまで怒られるとは心外でございますな。緊急コードの滞在時間を守っていただいたまで・・・違いますか？」

第25話

「適材適所という言葉をしっているかしら？地球人という面白い案件を、ろくな会話もなしに流された・・・分りますか？私は怒っています」

「浅田勇人の見た映像のイメージは大量の死のイメージ違いますか？」

「・・・・・・・・・・・・・ほう」

・
・
空気が凍るようなプレッシャーに物おじせずモルワスは前に出る・

「私は神官長として監視していただけです。はっきりとは見えませんでした、あれは禍神の力ではありませんか？」

禍神・・・始まりの神戦においてラティカと互角に戦った怪物、言い伝えでは最も残酷な力を持っていたという負の力の塊でもある。名をデイスピア・デイエゴルティアという・・・地球に現れた怪物と同じ名前なのは偶然か

「禍神は、この世界においてあつてはならない力・・・ラティカの加護が満ちている世界においてのイレギュラー能力を持っている可能性がある・・・それだけで危険視する理由は分かるでしょう」

「本当に禍神の力を持っていると思う？」

「それを聞きに来たのです」

モルワスは未来を知る者に問いかける

「あの二人の力は何なのですか？」

「回避と解放」

「？ 未来予知の結果ですか？」

エルディアーナは初めてモルワスを見ながら未来を語る

「禍神の力を感じた理由は地球が禍神に冒されていたからでしょう・
・能力は回避能力の方がレアですが、解放能力の方は一般的な力
です。どうです・警戒するほどの力ですか？」

「禍神の力との関連性は……ありませんね、失礼いたしました」

「分かればいいのです」

そう言い切り目線を前に戻すと、遠くの空に船が見えた。

「モルワス下がってくれませんか？私は機嫌が悪いので」

「最後に1つだけ教えてください！神官モケッド・コロウを同乗させた理由は何ですか？」

「ラティカの恩恵を受けた責任です」

これ以上は本当に機嫌を損なうと感じ、何も言わずに礼をして下

がる。

静かになった神殿の最上部で髪をなびかせながら風を受けていた・

・

「ここの風は気持ちいい・・・それにしてもお話ができないとは思わなかったわね」

今日の事を思い出して悲しくなってきた・・・しかし、

「さてと・・・結果♪ 結果♪」

歌いながら空間から杖を取り出し、円を描き腕のマルチトランサーのダイヤルを調整していく。

そして、円の中から光の線を取り出し接続する・・・接続する場所は、腕の方にあつた。

「遮断結界・・・光の陣！受け取りラティカ周波数745・69に調整・・・受信中・・・受信中・・・受信中・・・遅い」

エルディアーナがイライラしている頃、フリードの戦艦では・・・

第26話

「ふぬう！こうやってこう！」

モケッド・コロウの体が光る・

「おお！凄い！」

「勇君・・・そんなに感動するところ？」

「男の夢だよ・・・オーラを纏うのは！」

勇人が男の夢にときめいていた・・・そして、フリードは素振りしていた。

『あなた達・・・何をしているの？』

エルディアーナの冷たい一言がモケッド・コロウから響いた。

「エルディアーナ様！もちろん交流をとっております」

『わ・た・し・に・対する報告は？』

「ふぬう・・・すみません」

エルディアーナさん怖い！というかモケッドさんが強張ってる・・・
マルチトランサーのダイヤルを操作し、赤いボタンを押すとエルディアーナさんが現れた。

『神官モケツド・・・あなたの任務は、なんでしたっけ？』

「はっ！浅田勇人、神宮さくらの経過観察及びエルディアーナ様の連絡係です」

『よろしい・・・失礼いたしました。先程お会いしましたね？エルディアーナです』

「「はいっ」」

『そんな硬くなくてもいいんですよ？神託を授けた仲ではありませんか』

どんな仲だ！　と思うが、何をしゃべればいいのかが分からない。
・

「あなた方の思うがままに話せばいいのです・・・エルディアーナ様も人なのでから、話かけて無視されたら悲しいはずです。そのままでいいのですか？」

モケツドさんの言葉が心に響く・・・そうだな・・・話す事が重要だよな！

「あのエルディアーナさん！先程はありがとうございましたッ・・・おかげで病室以外でも行動できるし、あっすいません」

『敬語が重要ではないですよ・・・勇人さん・・・心が伝わればいいのです。感謝の気持ちは溢れるほど伝わってきますよ』

ほっ息をはくと、さくらが

「私もお礼をさせて下さい！エルディアーナ様のおかげで」

『様は禁止で』

「すいませんッいや、失礼しました・・・でも」

『分かります・・・しかし、私は神民以外の方に様付けで呼ばれたくないのです。神官モケッドが言ったように、神民にとっては神様でもそうでない方には人として接して欲しいのです』

「分かりました・・・エルディアーナさん・・・ありがとうございました！」

第27話

「泣かないでいいぞ！娘よ！誰が何と言おうとちゃんとできてたから！なっ」

ココアちゃんを慰めている・・・本当にいい父親だな・・・

「なんでも屋つて事ですか？」

「さくら・・・まとめられたたら元も子もないだろうが・・・でも悪い事しているように聞こえなかったんですが？」

『まあ略奪目的の海賊とは私とも交流ないだろうしね』

「そうですね・・・じゃあなんで避けるべきなんですか？」

『神として了承できないと言ってるんです・・・はつきり言ってるリードの未来は壮絶です。その戦いに巻き込またくないのです』

「未来とか簡単に言っているのか？っていうか俺の未来壮絶なのかよ！」

『あなたが普通の人生を送っているとおもってたんですか？私としては生き残ったからには平和に過ごして欲しいのです』

「でも・・・その・・・地球を救う事は・・・できないんですか？」

さくらが訴える・・・そうだ・・・生まれ故郷を救いたい気持ちは俺にだって・・・

「あなた達に何ができるのですか？」

その言葉が胸に突き刺さる・・・何ができる？

『世界も次元も時間さえ超えた世界を救う事ができるのですか？
さつきまで生きる事さえままならなかった人達が・・・厳しい事を
いますが、私達に任せてください』

「その方がいいでしょう・・・神託を受ければ寿命という概念は、
無視できます。千ラティカ年までは普通に生きられます・・・待つ時
間は長くなっても、いつかエルディアーナ様が活路を見出してくれ
るでしょう」

モケッドさんがやさしく諭す・・・そうか無理なんだ・・・そ
うだよな・・・っていうか、千ラティカも生きられるって言われても
・何をすればいいんだよ・・・

「お父さん・・・なんとかならないの？」

「なんとかなるけど本人達やる気無くしているからな・・・」

ほら・・・なんとかなる・・・

「なんとかなるんですか！ 地球救えるんですか！」

沈んでいたさくらもフリードさんを見る・・・モケッドさんもエル
ディアーナさんも驚いてフリードを見ている。

「おお・・・おどろいたああ・・・なんだよいきなり・・・」

『それはこっちのセリフよ・・・私が無いといった事を否定したのよ？未来を知る者にノーを出した・・・誰だって気になるわ』

「なるほどな・・・神に見えない事なら神以上の力を使えばいい、そうだろう？」

「神以上とな・・・原神の遺産ですかな？」

「げんしんの遺産とはなんなんですか？」

さくらが問いかけると、エルディアーナさんは溜め息をつきながら

第28話

『原神の遺産・・禁忌の神具です。ラティカ様はもちろんクロノスなどの神の力の遺産の事です』

「クロノスは確か時の神だったはず・・なら俺とさくらのいた場所から時を戻せば!」

『そんな都合のいい道具があるなら歴史は変え放題だわ・・フリードもいい加減な事を言わないの』

「なら・・こいつらの好きにさせればいいだろう?」

「えっ好きにっでどうすれば?」

「エルディアーナについていけば・・おそらく確立はゼロに近いが安全に暮らせる。だが、俺たちについてくれば途中で死ぬ可能性もあるが、刺激的な毎日と自分で切り開く力と救える可能性をやるっ」

これはきつとこれからの人生を左右する選択肢・・希望のない生の道か、それとも希望のある死の道か・・選ばなくちゃいけないのだが

「ゆっッ」

「選択肢を他人に預けるな!」

「ひっ!」

「フリード！度が過ぎるぞ！」

「じゃあお前らがこいつらの面倒みるのか？」

「そうだ！神の民として当然だ」

「御立派な事だな・・・さすがは未来を知る者だな。こいつらの未来もお見通しってか」

『何がしたいの？フリードリヒ・ギルスローブ』

声が変わる・・・最初の凄みのある声だ

「おい・・・エルディアーナ1つ教えてやるよ。これで2回目か？まあいい、人間の可能性という未来を甘く見るなよ？」

『よくほざくわね・・・若造が・・・』

そういつとフリードさんは震えているココアちゃんをあやしなから会議室を出ていく。ドツと体が疲れて床に座ってしまう・・・まだ足が震えていた。

「ッフリードさんって怖い人なんですネ」

「ふぬう・・・だてに海賊の船長ではないからな」

『さくらさん大丈夫？』

「はいっなんとか・・・でも腰が抜けちゃって」

『あいつはいつもそうよ・・・自分の認めない者には厳しく、認め
た者には真摯に接する。そうやって生きてきた男よ・・・第5次ワ
ールドラティカ戦争を最前線で生き抜いてきた男だからね、色々達
観してるのよ』

「第5次ワールドラティカ戦争って？生き残ったってどういう事で
す？」

『ワールドラティカ全体を巻き込んだ戦争の事を言うの・・・そし
て、その戦争は5回あったの、第5次ワールドラティカ戦争でフリ
ードは絶対に勝てないと言われていたワールドアクターの1人に勝
ってしまったの』

第29話

「ワールドアクター？」

さくらが聞き返す・・・なんだワールドアクターって

「その話は後にしませんか？お腹も減ったでしょうし」

『そうね・・・ワールドアクターの話は置いておきましょう』

？　なんでだろうと思うが、モケツドさんは

「それではエルディアーナ様失礼致します」

『ええ、分かったわ』

いそいそと片付けてしまう・・・エルディアーナさんの姿が消える

「これについては関わらない方がよいと判断しました・・・すいませんが了承を」

「そうなんですか・・・」

「ってしまったのだ！能力説明する前に通信を切ってしまった！」

「そうだ！手の甲に・・・」

手の甲を見ると丸く白い円に、六角形に黒い四角が入っていた。そして・・・黒い点が真ん中に入っていた・・・シンプルだが、何

故だろう小さな黒い点が・・・恐怖の塊にしか見えなかった。

「さくらは？」

「・・・刺青みたいで嫌だから・・・勇君のも見せてね・・・」

なんかエロいな・・・って何考えているんだ・・・俺！

もじもじしながら手の甲を見せるさくら・・・顔も少し赤いつてそっちじゃねえ！

手の甲には、やはり丸く白い円があつた。違うのは黄色い線が、中心を避けるように6本入っていた。

「勇君黒なんだ・・・いいな・・・はあ」

「？どうして黒がいいんだよ・・・俺は嫌だな・・・なんかディスプレイアを思い出すから」

「そう・・・だよな」

「何故そこまで髪を染めるのを抵抗しているのです？神託の色に合わせた方が力のイメージがしやすいですぞ」

「髪を染めるってどういうことですか？」

「ワールドラティカの常識として円内部の絵の色に合わせて染める習慣があるのです。ラティカとは曖昧な力なので、自分の色に合わせた方がラティカが馴染みやすいのです。その事を説明すると・・・大層怒られましてな」

「当たり前です！唯でさえ刺青みたいなものを刻んで、その上きッ

金髪に染めろってどういことですか！」

そう言えば・・・さくらは髪染めた人なんてっていつもいってるもんな・・・

「髪の色イメージで力変わるんですか？

第30話

「当たり前です！私は白ですが、この全身純白でなければ本来の力は発揮できません！白くない私など私ではない・・・そこまで世界が変わります！」

力説するモケツドさん・・・はつきり言って怖い！

「俺は逆に染めて見たいな・・・憧れるよなあ・・・金髪とか茶髪とか」

「勇君は私の敵になりました」

「なんでだ！だいたいお前は硬すぎるんだよ！だいたい」

ピーと艦内に音が響く。そしてべるさんの声が聞こえた

「ストリーム発見により破壊任務を開始します。各員戦闘配備！繰り返す」

繰り返し放送が流れる・・・ストリーム？また知らない言葉が・・・

「メインデッキにいきましょうか？ストリームは見ごたえがありますよ」

「すみません！分からない事ばかりで・・・ストリームってなんですか？」

「行けば分かりますよ」

「でも・・・」

そうだ・・・フリードさんはさっき凄い怒ってた・・・怖いな

「大丈夫ですぞ！フリードは切り替えも早いですから・・・きっと・・・」

「メインデッキ」

「ロイド、パルロイ！計算急げ！アクア予想データを早く！スパイラルはエンジン準備！ベル計測結果をアクアへ！トレイ・・・」

指示を飛ばしてる船長フリードさんがいた。俺達はメインデッキを上から見るようなテラスのような場所にいた。

「皆バタバタしてますね・・・フリードさんも凄い真剣だし」

「あれが原因ですな」

指差す先にモニターがあり、そこには隕石の集合体があった。

「あれがストリーム？隕石に見えますが・・・」

「流れに乗った隕石の事を言うのです。星が生む力の流れに乗った隕石は脅威なのです」

よく見ると、隕石は周りに青い光を纏っていた。

「隕石もラティカを纏ってしまうのです・・・だからストリームになった隕石は、災害といっても間違いないでしょう。ストリームを見かけたり、隕石を発見したりした場合は破壊をするという法律があるくらいです」

「隕石破壊が法律で決まってるんですか！地球では隕石1つで大騒ぎなのに」

さくらの言う通りだ・・・隕石破壊それが法律で決められているって・

「あの・・・どれくらい星があるんですか？」

「難しい事を聞きますな・・・アクアやロイドが専門分野の話ですからな。大惑星は100位ありましたかな」

「100!」「」

「おや・・・始まりますぞ！世界でもこの船にしかできない一隻でのストリーム破壊が」

第31話

「戦艦ギルスローブ！ これよりストリーム破壊任務を行う！ 各員戦闘配備」

「了解！」

ここにいる全員の声が揃った。そしてアクアさんが

「ラティカ？（ファイブ）ライン、ラティカ？サークルの軌道に乗っています！ 測定結果全て表示完了！ 妨害地点座標入力完了！」

「よし、スパイラル準備はいいか！」

『いつでもいいぞ』

「スパイラルエンジン起動開始！ 座標入力地点に高速移動開始各員衝撃に備えよ！」

「さて私に掴まってください……今のあなたたちでも厳しい速度に入りますので」

「どういう意味ですか？」

「答えはすぐに……」

そう言っただけ俺達を包み込むように後ろから抱き締める。フリードさんはチラッとこっちをみてから……

「スパイラルエンジン起動！」

スパイラルはエンジンルームの中の特殊な部屋にいた。赤い色の部屋はまるで熱を持っているようだった。その赤い部屋を中心に台座と透き通るような赤い水晶のようなものがあつた。そこに手を置き、待機していた……

『スパイラルエンジン起動！』

その声を聞いてからゆつくりと能力を発動していく。スパイラルの能力は回転……回す力である。スパイラルエンジンとは回転能力でラティカを回し、エネルギーをスクリューにして移動するこの船にしか搭載していない機能である。

「イメージは赤……回転は熱を生みエネルギーを生む！」

そういつと部屋の赤が回り始める……静かに……だが確実に……
……そして、

爆発した！

戦艦に赤い線が回りながら入ったと思つた瞬間！世界がぶつかつてくる感覚に襲われた。何が起こっているのか分からない……モケッドさんに抱き締められている事すら

忘れるほどの衝撃・・・息が吸えない

「はっはっはっ、これは私でも2人庇いながらは厳しい!」

「モケツドだらしねえなあ! 俺なんかスパイラルエンジン使用状態でも踊れるぜっ! グボツ!」

やっと収まった……この船は乗るだけでも危険なのか!

「船長謝る事がありますか?」

「ベルツ! 高速移動中に全力で蹴るってどういう神経ツ!」

「おとっじゃない、船長! 指示を!」

第32話

アクアさんが叫んだのが聞こえた。やっと意識もはつきりしてきたって……

「隕石近ッ！」

「アクア！ シュミレーション通り行くぞ！」

「任せて」

アクアさんがとてつもないスピードで何かを入力していく。青い隕石群の近くに何かを戦艦から放っていく……

「切断レーザーポイント配置……発射！」

その赤いが射出されていき、隕石群に素早く近づいていくと色が青に変わり点と点が結ばれるようにレーザーを形成していくのだが、

「あれっ？ 当たらない……」

正確にはレーザーがまるで周りの青い光を切り裂くように動いていた。精密に1つ1つを切り離しながら進んでいくレーザーは時間が経つと消えていく……

「重量場切り離し及びラティカ切除成功……次の工程の指示を」

「崩裂破壊弾発射！ 破片に気をつけろよ」

ミサイルのような弾頭を隕石1つ1つにぶつけていく・・・当たったところからヒビが入り、隕石がゆっくり崩れていく。

「凄い！　なんであんな綺麗に崩れるの！」

「外部の力を取り除いてから鉱物を朽ちさせる薬を入れた弾薬を段階的に射出する構造になっている崩壊破壊弾を用いているので、あのようになるのです」

「この世界はなんでもあるのか……」

「それをレーザー砲台で焼き払っていく・・・これがストリーム処理のギルスローブ海賊団ならではの方法ですな」

「一般的な方法はどうするんですか？」

「計算が難しいので準備が必要なんですけど・・・アクアは1人でストリーム流速計測を全てやってしますのです」

「えっ・・・普通何人くらいでするものなんですか？」

「頭脳系能力者1000人くらいでやるものなのです・・・世界中が欲しがる人材ですな」

「……………」

無言になるくらいアクアさんが凄い事が分かった……

「ストリーム破壊任務終了！総員良くやった以上」

「よっしゃ飯にしようぜ」「疲れたー」「今回は楽だったね」などの声が聞こえる。

フリードさんがこっちにくる。どうしよう――

「うちのアクアは凄いだろ！ 自慢の娘だ！」

何言われるかと思ったら娘自慢だった。体の力が抜ける……

「なに緊張してんだよ、さっきはさっきって切り替えていこうぜ！ 面倒くさいだろ？」

「……そうですよね」

第33話

「あのツフリードさん聞きたい事があるんですが……」

「んっ、なんださくらちゃん？」

「今はどこに向かっていているんですか？」

「そういえば伝えてなかったな、アストレルツランド……俺達の本部がある星だ。補給地としてジーハルエンダによるから、そこで決めてくれ」

「決めるって……あなた達についていくか、モケッドさんについていかですよね……」

「そういう事、さて飯食ったら能力発現と特訓を軽くやっておくか！」

「特訓！」

「なんで勇君は特訓で目を光らせるの?!」

「特訓と聞いて興奮しない男はいないはずだよ」

「おお！ では私も参加しますか！」

「モケッドも参加か！ 組み手でもするか！」

「化け物2人で戦艦内で暴れさせるかああ！」

「ベルが一番暴れてるだろうっおお！」

「ははは……はあー」

なんて疲れる人達だろう……と思いながらも笑ってる俺がいた。

「さて能力発現訓練を始める！ 参加者ココア、スパイラル、ベル、モケッド、ロイド、勇人、さくらの7人で行きます！ はいっパチパチ」

ココアちゃんが拍手している……つられて俺とさくらも拍手する。

「船長！ 質問です」

「なんだね！ロイド君」

「なんでここに僕がいるんでしょうか？」

「暇そうだったから」

「暇な訳ないでしょ！ アクアさんに任された仕事沢山あるですから！」

「お前が一番弱いから呼んだ……これでいい？」

「投げやりすぎでしょ！ あっちなみにロイド・フレイルっていいます、よろしく2人とも」

ペコリと頭を下げる……その間も皆に弄られていた……なんか、
かわいそうだ

「さてロイド弄りはこの辺にして……ここは訓練場宇宙空間だから
こそトレーニングを欠かさない為に作られた特別室だ」

「？ 普通の廊下に見えますが……」

「突っ込むなよ！ 俺も本当は広い部屋作りたかったんだよ！ 戦
艦って都合上無理なんだよ！ 畜生！」

「泣かないでパパ！ 大丈夫……この廊下は唯の廊下じゃないんだ
から、ね？」

「船長は置いというココアの言う通り……この廊下の壁は空間能
力者が作った壁なの。だから、ラティカを込めると！」

第34話

壁が迫ってきたって潰れる?!

「大丈夫だから身を任せて……」

ベルさんの言葉を信じていると、壁に体が沈んでいく……そして視覚が全く違う部屋を映し出した

「ここは?」

「凄い!」

さくらは疑問を、俺は感嘆を、何故なら東京ドーム位の大きさのクリスタルのようなものに覆われている空間が現れたからである。その空間では何人かが柔軟運動やランニングをしていた。

「君達! 今のSGはいくつだ?」
スターシート

スパイラルさんがそう聞くと……

「えっと、5SGでやってますね……適度な運動程度ですよ、あつちなみにSGとは星が持つ重力の事でシートとは少し違う星の力の単位のことなんすよ。地球を1SGとすると5倍の重力で運動しているってことっすね」

「あなた達の星の重力をアクアが調べた結果0・98SGである事が判明してるわ。だから普通の星より少し軽いくらいかしらね」

「今からいく星は大丈夫ですか？」

「2SGだからちょっと重いくらいね」

「要するに2倍の重力って事ですか？」

「つまりはそうよ」

ベルさんとの会話で分かったのは生きていくのは大変だということだけだった……………

「あのっ神の星は大丈夫だったんですか？」

「我らが母星レイドヘブンは快適環境に星そのものを変化させてラティカを制御しているので苦に感じるものは全て排除しています」

モケッドさんが誇らしげに語る——故郷か——

「ところで船長は？」

スパイラルさんが聞くと、ココアちゃんは天真爛漫な笑顔で指差す。

「ロイド、ケルト！ そんな速度で勝てると思ってるのが！ サイル素振り遅い！ 型も崩れてるぞ！ ほらっそこ！ ………………」

「鬼船長！ 僕は通信／情報整理担当だって言ってるでしょうっ！」

「我々も運動しに来たんですが！」

「ゴタゴタうるせえ！ 俺が来たからには、ただでは帰さん！ ほらっ 続き！」

ギヤーギヤー騒ぐ声が向こうから聞こえてくる。近付こうとする
とスパイラルさんが止める

「危ない！ その線から先に行つてはいけない！」

「！ もしかしてこつから先が……」

「5SGエリアだ……悪いが今の君達では、大怪我をするだろう」

「5倍の重力下であんな動けるんですか……凄いですね」

第35話

さくらが呆れている……当たり前だろう。男だけなら分かるが女性もいて、フリードさんはそんな事を気にせず全員平等にすごっていたのだから。

「フリード！こっちは任せてもらっていいのか？勝手に始めるぞ！」

頷くフリードさんに、近づくモケツドさん……追いかけるベルさん……大変そうだ。そしてフリードさん以外が並べられた。

「ぜえっぜーっ、それでは能力見せつつあなた達の能力を調べていきましようか……」

「ベル姉さん……それなら僕の能力を紹介した方がいいと思うっすよ」

そっとうと俺達を見ながらぶつぶつ言い始めた……そして、

「ラティカ数値4……低いっすね、やっぱりラティカの集め方を知らないとこんな低いんですね。あっさくらさんの方が、2高いっすね」

「何の事です？」

「僕の能力は数値表示といって、ありとあらゆるものを数値化する能力なんですよ。その力で、あなた達のラティカ値つまり重強度を表示しているんですよ……あっちなみに重強っていうのは強さって事です」

「強さ4つてことですか・・なんかショックだなー・・そういえば平均はどれくらいなんですか、10くらいですか？」

「んー悪いけど500だね、でも大丈夫！　今からラティカの集め方を練習しますから」

俺ががつくりしてる中、ロイドさんがスパイラルさんをチラッと見る・・頷くと、スパイラルさんは片手に光が集まっていき、その光が赤く光始めると回り始めた！

「最初の光がラティカの力の1つエネルギーを放出及び集めたものだ。それを能力で回転させているんだ」

初めてスパイラルさんが生き生きしていた……勉強以外では凄そうだな……

「何か失礼な事を考えられている気がするが……まあいい。簡単に見えるがこれが難しいのだ、ラティカを集めて自分の力にする……これをラティカの集束という」

「さすがスパイラルさんっすね！　よっラティカコントロールのプロフェッショナル！」

ロイドさんがはやしたてる……それに気を良くしたスパイラルさんは調子に乗って回転を強くしていく……しかし！

「迷惑だから、そこまで」

そう言うと、ベルさんが素早く手をかざし消した！

第36話

「ではやってみませんか？ エルディアーナ様への報告もあるので」

「わかりました！ やってみます！」

「勇君……そこまで好きなの？ こういうの……」

当たり前じゃないかという気持ちを抑えて右手の甲にあるラティカの恩恵に力を籠めるように右手のひらに力を入れた！

「おおおおお！ ううううう！ でらあああああ！」

……チーン

「出ません……というか何も感じません……」

「やはり難しいですか……まあ予想通りといったところです。では、ラティカの色である白をイメージして円を描いてみてください」

「わかりました……白い円ですね」

もう一度やる……今度は右手に白い円をイメージしながら力を籠める……すると白い小さな光が生まれた。

「えっ！ こんな簡単にできるんだ！ スゲー！」

言葉が少年時代に戻った瞬間灰色になった。驚くとモケッドさんが落ち着かせるように

「大丈夫です……勇人さんに刻まれているラティカの恩恵と同じ色に近付いたという事は、本来の性格に近付いたからでしょう……そのしゃべり方、性格が本来のあなた何でしょう」

大きくなる光をみると、自制していたものが見抜かれた気がした……ここではありのままにいていいのだろうか？ いや……いていいのか

「おれはありのままでいいんで……いいのか」

先生に社会に弾圧された感情が溢れる……灰色が自分の恩恵に馴染むように黒に近付く、誰かを守る力が欲しい！

地球では馬鹿にされる感情を持つていいのか！

子供のころの夢を叶えられるのか！

今叶えたい夢に手が届くのか！

灰色が黒くなっていくのに嫌じゃなかった。むしろ握りたくなつた……いやっ握る！ すると爆発するように自分の体に取り込まれていく！

体中が強くなっている気がした……

「おおっそれこそラティカの取り込み！ 肉体強化の基本ですぞ！ ロイドよ今のラティカ数値はいくつかわかるか？」

「えっぜえっぜえっえーと569っすね！ 初めてとは思えない量

っすよ、ってスパイラルさんもいいでしょ？ こっちのゾーンは重いんっすよ！」

「うるさい！ 貴様が茶化して言ったのを後から気付いたんだ！ 恥の分はお前に償ってもらおう！」

ギャーギャーいいながらも答えるのが凄い…… って俺平均以上だ！

第37話

「予想以上の順応度の高さですな！ 勇人さんには才能がありますな、ふぬう……さくらさんはやってみませんか？」

そう聞くとさくらは顔を伏せる……そして小声で

「やってるもん……」

「えっ何て言っただ、さくら？ 声小さいよ」

「さっきからやってるの！ 全然できないのよ！ 言わせないでよ
うううう……」

こつこつに積極的ではない筈さくらが挑戦してたなんて……つ
ていうか涙目になるほど恥ずかしいのか！

「難しく考えすぎだよー、もっと自然にやればいいんだよー、私が
応援するから！」

「コアちゃんがさくらの前に行くと声を張り上げて！

「がんばれさくら！ 行けーさくら！ 踏ん張れさくら！」

本当に応援を始めた！？ 体全体を使った応援はみてる方もほの
ぼのしてくる……って

「さくら！ 手っ見てみる！」

「えっ……あつ集まつてる！　できた！　できたよココアちゃん！」

さくらはおっかなびっくり光を見ながらココアちゃんにお礼を言っていた。上手くいきすぎだろ……と思っているとベルさんが、

「あれがココア的能力である応援よ」

「応援が能力なんですか？」

「わからないのよ……ココアが言った事が実現するわけでもないし、ココア自身も頑張れて言ってるだけっていうし……研究しようと仲間の1人が言ったのだけど」

「ベル！　その件は許さんと言ってるだろ！　ココアを何だと思っているんだ！」

「だから……その気はねえって言ってるんだろ！　いい加減にしろよ！　この親バカが！」

ベルさん起るとヤンキー口調になるな……っていうかフリードさん地獄耳だな。結構距離あるのに……さくらの方は、ココアちゃんの応援を受けながらモケッドさんに教えて貰っていた

「握るの……怖いです……火傷しそうで」

「大丈夫です！　思い切って握っても、何の危険もありませんので」

「がんばってさくら！　こうだよ……ウーン！　ポン！　シュウン」

ココアちゃんがいとも簡単にやって見せる。ココアちゃんに刺激

されて、やっとさくらもゆつくり手を握る……

「体が暖かい……これが、ラティカの取り込みなんですね」

「ちなみに390ですね。かなり低い方っす」

「いらん事言っな！」

追ってたスパイラルさんとベルさんがロイドさんを蹴った

「ぐばわああああ！ さっきまで聞いてきたのに……理不尽だ」

バタツと音と共に反対側の壁に張り付いた体が落ちる……自業自得な筈だが、可哀想としか思えない。だが……すぐ起き上がりスパイラルさんの追撃をかわしていた。あの人も凄いな……

「私は才能ないのかなあ……はあ」

「才能ではなくて、馴染まないのでしょうか……金色のラティカを持っているさくらさん自身まだ自分の色を理解できていないのでしょうか。その為、ラティカが馴染まないのですよ」

「勇君はどうやったの？」

「うーん……特に考えなかったけど抑えつけてるものを理解した瞬間、爆発的に体に入ってきたな。説明はしにくいよ」

そっかーと、落ち込むさくら……なんだかんだいってお前も結構好きそうじゃん！

「次は取り込んでラティカや集めたラティカを自分の色にし、能力を発現してみましようか……自分のラティカの恩恵をイメージすればできますぞ」

モケッドさんに言われた通り自分の恩恵を見ながらイメージを固める……すると

「何だろ……解き放たれる？ 感じがする……」

「どこが解き放たれてるか……わかりますか？」

「足ですね……筋肉が盛り上がっていくような感覚です」

「では私が少し離れますので、そこまで走って見てください……思いつききいていいですよ」

違う重力ゾーンのギリギリで立ち止まるモケッドさん……あそこまで走ればいいのか、でも結構距離あるな……100メートルは軽くあると思った。足に力を籠めて走り出す！ 一歩目！

「えッ！」

間抜けな声しか出なかった。まずい！ 足に溜まっていたものが、噴き出し爆発する！

「うわああああ！」

上に飛び上がる！モケッドさんも驚いている——ってか上にぶつか
る！

「何をしているんだ……よつと！」

「スパイラルさんっ！ 助かりました！ ありがとうございます」

というかさっきまでロイドさん追っかけてたのではと、思いながら反対側を見るとロイドさんがボロボロの状態で首を掴まれていた。

「これは気にするな」

「酷いっすよ……ガクッ」

——ロイドさん——さらば

「力の使い方が難しそうだな……扱いには気を付けた方がいいな、さもないとさっきのように力の向きを間違える」

「わかりました……気を付けます」

モケッドさんとさくらが心配して近付いてくる

「大丈夫ですか！ 私の配慮が至らず、すみません」

「勇君さっきの凄かったけど大丈夫だった？」

第38話

「ああ……スパイラルさんに助けられたから……2人ともありがとう心配してくれて」

頷くモケツドさんと、ほっと肩を落とすさくら……そしてココアちゃんが手を振っていた。

「それでは、さくらさんやってみます?」

ベルさんはなにもなかったように進める……

「私もやるんですか……」

「もちろんよ、あなた達の力を知るための集まりなんだから」

「ああ! さくらさん髪染める必要はまだありません……力を強くしたいだとか先を求める人の話しですからね」

ベルさんがそういうことかという感じで頷く。さくらも安心したようだ。

「じゃあ……やってみます!」

しばらくすると、さくらの周りが光始めた!

「なんか出ました! けど何だろ? よせつけないイメージがする」

「まさかと思うけど……結界系能力かしら?」

「軽く何か投げてみますか？ …… よつと」

モケツドさんは、手のひらから粒みたいなのを10個程作りさくらに投げた…… さくらが不思議そうな顔をしていると粒が加速した！

「きゃあああああ！」

しかし光の粒は当たらずに、右に左に逸れていく！ モケツドさんも驚いていた！

「凄いわね…… 結界系能力の中で上位に位置する力だわ。 自分によせつけない力とでも言うべきかしらね」

「これは凄い能力持ちが出ましたな！ ところでマルチトランサーの正しい使い方は教わりましたか？」

「いきなり話を変えたわね……」

どうして話を急に变えたかは俺でもわかる…… フリードさんを含め、スパイラルさん、ロイドさん訓練してた人達が出ていく…… 何かあったようだ

「この船は…… そのつ忙しいんですね…… 色々と」

「星域を無視して進んでるからね…… 色んな事が起きるのよ…… 私と呼ばれなかったから深刻じゃないと思うけど」

言いながらマルチトランサーを細かく見ながら話していた。

「マルチトランサーの話に戻しますと、ラティカが使えるようになったので、ちゃんと機能するようになりましたよ。使ってみますか？」

腕に付いているマルチトランサーを見ると赤いスイッチが光っていた。さっきまで光ってなかったのにも思いながら、押してみると画面が立体的に表示された！

「表示された画面をあなた達用にアクアが調整したらしいけど……日本語？ になってるかしら。私は詳しくないのだけど……携帯？ という機械に合わせて作ったみたいよ」

クリックとか書いてあるけど——アクアさん——見にくいです、逆に

「どうかしたの？」

「いや……時間が凄いスピードで動いてて見にくいです……せつかく作ってもらったのにすいません」

「どれどれ？ ……目がチカチカしますな。言語だけ残して初期設定にしましょう、えーっと……ふぬう……わからん」

「初期設定だったら、こうやって……こうね！ さくらのも直すわね」

ああ、見やすくなったっていつか、ダイヤルで合わせるみたいだが……機能の多さが凄い！ 翻訳機能など、20は機能があった。

「全部使う事ないから時間調整とか翻訳とか教えるわね」

「「お願いします」」

俺達が声を揃えて教えてもらっている頃——フリード達は——

「ぎゃあああああ、近いって！　なんでこんな近くにこんなにいるの?!」

ピラニア？　みたいな生物と交戦していた。

「バルニアが来ているのはわかったんだけど……進路変更してこっちに向かってきたの！　お父さんなんとかできる?!」

バルニアという生物がモニターを埋め尽くしていた！　今はスパイラルの回転能力を使ったバリアを張ってしのいでいるが、難しい状況だった。

「進路変更するしかないか……近くの星域で行けそうな星はあるか？」

ロイドは素早く返答する！

「タルデノですね！　危険区域ですが……タルデノ星のグレウダギループが一番近いです！　ドラゴンホール発生区域があるけど、ここで消耗するよりはマシっす」

「ちっ俺が出れば……」

フリードが出るためには上のハッチをあけなければならない・・

賢いバルニアは、その隙を見逃さない！ 開いた瞬間そこに突っ込んでくるだろう。

バルニアは魚の形をしているが、足が付いておりラティカを足で蹴る事で高速移動を可能とした。色は赤で刺々しいボディに鋭いひれは凶器に等しい！ 小さいといっても5メートルはある体に、この機動性は反則だった。

そのバルニアが群れを作っているのだ……これが一級危険生物とされる理由である。

「お父さんがでても数が多過ぎるから無理よ……この数は異常といっても過言ではないわ」

だが1人状況を突破できる男がいた——赤い部屋にて静かに力を溜めている男——スパイラル・アウェイク回転の能力者バリアを放ちながらも、その表情には余裕があった。

『スパイラル全砲門解放と共にかき回せるか？』

「了解した……私に合わせてくれ」

第39話

スパイラルは力を徐々に開放していく。纏まった回転によるバリ
アを……豪快に剥がす！ その勢いで弾かれたバルニアは体勢を立
て直そうするが、遅い！

戦艦ギルスローブは飛んでいく位置をアクアさんが計算し尽くし
ていた。掃討といっても過言ではない一斉掃射にバルニアは何もで
きなかった。

その間に戦艦ギルスローブは進路をタルデノに変更し、急速旋回
していた。だが、バルニアが諦める筈がない……掃討を逃れたバル
ニアが次から次へと追ってくる。

——その時、宇宙という闇に銀が放たれた！——

「てめえらの相手は俺だ！」

フリードリヒ・ギルスローブが闇に映える銀の色を放ちながら
現れた。

「何が目的か知らんが俺達に喧嘩売ったからには覚悟できているん
だろうな！」

怒気とともに何処か冷たいものが溢れてくる……なのにバルニアは
逆に集まってくる。そこまできて異変に気付く……こいつら異常過
ぎる！

「ちっ何か、やな予感するな……早めに決着つけさせて……って」

バルニアの群れが、3つ位近付いてくるのがフリードの異常な視

力がとらえた。

（なにか起ころうとしている・・・）

その予感が当たる時は、もうそこまで迫っていた……奴らの狙いは――

タルデノ星のグレウダグループに着いたらしいのだが、様子がおかしい……フリードさんもないし、皆ドタバタしてるし……それに空が赤かった。

夕暮れとも違うそれは……まるで血のようだった……

「船長と連絡がつかない……あの程度だったら、そろそろ連絡が来る筈なんだが」

「スパイラル、それよりもドラゴンホール発生をなんとかしないと……タイミングが悪過ぎる！　なんでこんな時にドラゴンホールなんて起きているのよ！」

ベルさんがとてもイライラしているのがわかる……さくらも不安そうに俺の手を握っていた。

「勇君……何があつたのか、わかる？」

「わかんねえよ……なにも……」

デイスピア襲来の際に少し似ている……静かすぎる空に、慌てる大人達……なにもできない子供……どうすればいいんだよ……でも、あの時と違うのは

（今の俺には力があるディスプレイに対抗できる力が！）

だが、その気持ちを決意にできないのには理由があった……神様に……最強の男に言われた言葉が胸に突き刺さる

——お前になにができる？——

わかってるよ……あんた達に任せとけばいいってことぐらい……でも……でも……

「さくらさん、勇人さん！　ここは危険なので村にいきましょう！」

「わかりました、勇君行こう！」

俺の気持ちを察してか、知らずか……力強く手を掴み強引に連れていくモケッドさん……まるで俺のこれからのようだった。

村についたというのに静かだった……そこには不気味な静けさがあつた。

「これは一体……2人とも私から離れぬようにしてください！」

モケッドさんがマルチランサーを使って通信しようとした瞬間だった！

「ふうふうふう！　イヤアアアアア！」

奇妙な声が聞こえたと思ったと同時に鬼の顔が現れた！

「ゲンキジだと！　ふぬう！」

モケツドさんが素早く俺達を守るように鬼との間に入り、吹っ飛ばした！ 鬼の顔が遠くにいつてわかった………というか忘れられない……… あいつは！

——さくらや家族を食い荒らしたデイスピアだ！——

さくらを見ると体中が震えていた………そうかさくらからだ、あいつに俺が食われた事になるのか！許せな——

「ぎゃああはっはっはっはっはっはっはっはっは」

笑い声だけで伝わる………狂気と実力………桁外れだ………

「2人ともしつかりしなされ！ どうされた！」

モケツドさんの声で我に返る………どうする？ 何ができる？

「家屋へ！ 早く！」

俺が悩んでいる間に鬼の数が増えていた………家屋に入れなければ！ 無意識にさくらの手を取り無我夢中に走っていく。入った家屋で待っていたのは………

血の池で微笑む鬼だったただけだった。

悲鳴が聞こえた………モケツドは今すぐにもそつちに向かいたかったが、ゲンキジがそれを邪魔するように連携の取れた攻撃を重ねていく。

「貴様らの知能が高いのは知っていたが………これは冗談にも程がある！ 何故ここまで統率がとれているのだ！」

こいつらの名前はゲンキジといい、鬼のような巨大な顔に鎧のつ

いた手足が生えている。機動力はないがパワーと頑丈さが武器の厄介な魔物で、さらに知識が高い為ラティカコントロールがうまく、固有能力を所有している者までいる！

つまりラティカは人外の生き物にまで恩恵を授けるのである。

「ほれっほれっほれ！」

さつきからモケッドの前で鉄の棍棒を振っている奴は引き寄せる能力を持っているらしく、さつきから間合いが計りづらくてしょうがなった。

「おいっ！ オマエジャマ！ おれさまコウゲキできない！」

マルチトランサーのおかげで、こいつらの言葉はわかるのだが・・

「キィキィうるさいわ！ その口を塞ぎなされっふ！」

第40話

「そりゃっそりゃ！ オイラもさんせんだ！」

ゲンキジは全部で7体……しかし無茶苦茶な戦いにある程度の戦術がある……何故だ。

「裏に誰がいる？」

意味のない質問をぶつける……意外な事に返答があった。

「おれさまたちのかみのめいなり！」

「？ 貴様達に神に対する神に対する信仰があるとは思えぬが……
どういう意味なのだ」

返答はない——あるのは攻撃のみ！ しかし、それをまるでどんな攻撃が来るかわかってるように攻撃を避けていく。7体が攻撃してるというのに一発も当たらない……それどころか

「ぎひっ！」

7体の内の1体が足が壊れたのか倒れていた……

「神官の実力も舐められたものである。たかが7体のゲンキジで私を止められるとも思っていたか！」

「だとおもってこんなにつれてきたのだ！」

さらに20体のゲンキジが空から降ってきた……そして気付いた。

飛んできた方向にあるのは、

「ドラゴンホール発生区域から来ているだと！ あそこが今どれだけ危険か知らぬのか！」

「しまったこときやああああ！」

怒声と共に突撃するゲンキジにモケツドは回避しながら関節部分を触れていく。たったそれだけで触れた場所が崩れていく。分解……それは鉄だろうと人間だろうと崩れていくモケツドの能力であった。

普通強力な能力には制限が多いものだが、モケツドは神官としての力もある。その意味はエルディアーナの力である未来予測を、片鱗ではあるが使えるのという事。

「私はエルディアーナ様の恩恵も得ている……貴様らに勝機は一片もない！ それを証明しよう……ふぬうつうつ！」

先を見ながら防御不能の攻撃を食らわして行く……これが神の神官クラスの実力であった。

（早めに片付けて2人を追わなければ命が危ない！）

その頃、タルデノ星のグレウダギループの広大な山脈の頂上付近の空に異変が起こった。

ドラゴン、龍、竜と呼ばれるもの達が集まってきたのである……

そしてまるで示し合わせたかのように渦を作っていく！

これがドラゴンホール……産卵の為に雄達を作る警告の渦である。

この渦を乱す者には万の竜の裁きが下る……その山脈にさくらと
勇人は連れてこられていた。転送系能力者がいたのか、わずか数分
で連れてこられていた……そこでは数10体のゲンキジが山のよう
にいた。というか

「やまもりどん！ぎゃっはっはっはっはっは！オモイ……ギャ
フ」

一番下に居る奴が呻いていた。なんかほのぼのするのか？

「勇君……あれっ！」

さくらが指差す場所は『だいどころ』と書いてあった……よく見
えないが大量の血液が流れてきていた。つまり——あそこでは——
慣れてきた何て誰が言った——たちこまる臭いとリアルな肉の音——

「うえっっっ！ げほっ！いやああああ！」

さくらが吐くのもわかる……これが、こいつらの食事の方法なんだ
……俺は吐くわけにはいかない。さくらも護らなければ……

「おまえもくうか？」

そういつてなげたものと目があつた。

「うわああああ！ げほっおええっっ！」

さくらは泣き出して足から崩れてしまい、俺は反射的に何もかも吐
きだす！ 無理だ……俺にはできない！ できるわけがない！

『……思つた以上になさけねえ野郎だ……』

獣の慟哭が聞こえた気がした……何だ今のは？

俺達が蹲っている中——影が落ちた——顔を上げると今迄の黒い鬼と違い、赤い鬼が立っていた。

「お前が……神の子か……なんか違う……何故だ……お前なんだ？」

神の子？ どういう事だろう……それにこいつだけしゃべり方が違う気がする。

「ところで……隣の……女はなんだ？」

「いつしよにいたからつれてきた！ だめか？」

「邪魔だ……調理しろ」

ドクンツ！ 今何て言った？ 調理？ 殺すというのか？ また大事な人を護れないのか？ ふざけるな……ふざけるな

『いい怒りだ……使つか？ いいものがここにあるぞ』

また聞こえた……獣の声に導かれるようにエルディアーナさんに力を授かった時、見えた6本の柱に囲まれた狂気の泉の前に居た——柱の一つが赤く染まっていた。

俺はそれを欲していた——理由は単純明快！

「俺は——今度こそ——さくらを……さくらを！ 護るんだ！」

赤い柱に手を入れ、解放の力を使っていく……すると狂気の泉に血のように赤が浸みわたる。

『憤怒の死を受け取れ——小僧!』

「じゃあころすぞ! こい!」

「いやっ! やめて!」

俺はその瞬間激怒した! 鬼に、護れない自分に!

第41話

また護れないのか？ 違う！ 護るんだ！ 震える体を無理やり立たせる！ そしてさくらを掴んでいるゲンキジを睨みながら一步を踏み出し、拳を握る——すると手の甲にあるラティカの恩恵が灼熱のように赤く光り出した。

そして、さくらを掴んでいるゲンキジの手を殴ると消し飛ぶ！ さくらが後ろに倒れるが、目の前のゲンキジに怒りを覚えていた俺は！

「さくらに——触れるなああ！」

怒声とともに怒りを目の前のゲンキジにぶつける！ するとゲンキジが灼熱の炎に包まれて消し飛ぶように後ろに吹き飛んでいく。灼熱の塊は後ろのいるゲンキジを巻き込みながら吹き飛んでいく！ そして、その炎は山の壁にぶつかり轟音とともに炸裂した！ 手が焼けるように痛い……だが、周りのゲンキジがポカーンと口を開けて、その惨状をみていた。だが赤いゲンキジだけが納得したような感じで近づいてくる——

「……想像以上だ……貴様こそ……神に選ばれた者だ……」

まだ広がる爆発を見ながら満足そうに手を伸ばしてくる。手はさっきの一撃のせいかな、感覚すらなかった……でもさくらは俺が護る！

「その少年の目を見ればわかるだろう……野蛮な貴様達には不釣り合いだと思わないか？ 相手をしてほしければ俺はどうだ？」

その手を握ったのは俺達じゃなく赤髪の男だった。

「スパイラルさん！」

「ぬうつー！」

赤い鬼が一瞬で手を解き距離をとる……よく見ると少し掴まれていた手がねじれていた。

「その子たちは貴様が触れていいような存在ではないぞ……ゲンキジ共！」

そして、こちらを見ると

「遅くなつてすまない……近隣住民の避難に手間取つてな。大丈夫か？」

そう言いながらボロボロな俺達を見て、目が厳しいものになっていく。

「ゲンキジにしては賢いようだ……どうやっているか知らんが、フリードと我々を引き離すとはな。だが、貴様ら私を誰だと思っている……ギルスローブ海賊団第3部隊隊長スパイラル・アウェイク！ 貴様ら如きすぐにかたずけてやろう」

スパイラルさんの体に渦のようなものができ、その渦で俺達も包んでいく……やさしい風に抱かれているようだった。ゲンキジと呼ばれた化け物が一斉に突っ込んでくる！

「しにさらせい！」

しかし、不思議な事にまったく進めていない……それどころか

「おい！なんでこつちくる？」

「おまえこそ！　なんだこのかぜは？」

「答えを教えてやろう、始まりは風！　風は渦に！　渦は……」

迫って来ていたゲンキジが、渦の中のように翻弄されていく！

「竜巻になり愚者を飲み込む！」

声と共に巨大な竜巻が発生し、中に入っていたゲンキジが切り裂かれていった。さらに、そういうと回転で作った弾丸のようなものを敵にぶつけるだけで、かなりの強度のあるゲンキジ達が消しとでいった！

「スパイラル……噂以上の能力者だ……だが」

どこかような感じの赤いゲンキジが壁を叩くと中から10mはあ
るゲンキジとは違う手の長い鎧の化け物が現れた。

「アーレイエムか……まあ当然いるだろうな。だが戦闘がそいつに
できるのか？」

若干半笑いにスパイラルさんが言う——確かに戦闘ができそうには
見えない。ボーっとしているし、やる気もなさそうだった。

「我が能力……とくと見るがいい」

ゲンキジがアーレイエムに飛び込んだ！　そして信じられない事
に合体した。

「……………バカな」

スパイラルさんが驚くのも無理ない……………ニユルっとくつつくように2体が融合したのだ、誰だって驚く。

さらに咆哮が空に轟く！上空では万を超えるドラゴンと呼ばれる生き物が円を作っていたが、様子がおかしい……………何故かこつちを睨んでいた。

「そうだ！ここは危険だから戦闘区域を誘導するように頼まれていたんだった」

やっとわかった——スパイラルさんは真正のバカだ！

「はっはっはっは！おやぶんはここまでけいさんしてたんだ！すげえだろ！」

「……………計算通り……………だ？……………」

訂正皆バカだ！

「逃げるぞ！ 勇人！ さくら！」

スパイラルさんが俺達を抱え飛ぶ！その場所にゲンキジが大量に飛んできた。

「追え……………というか逃げろ」

融合している赤いゲンキジが長い手を使って岩山を木のように使用して追ってくる。他のゲンキジもシーソーのようなもので飛んで

来ていた。

「なあ？　ぎもんにおもったんだが」

「なんだ！　このひじょうじたいに！」

「さいごにのこったひとりはどうやってとぶんだ？」

「しるか！　はやくおれもとばせ！」

「おう！　まかせろ！」

対側をおもいつきり踏んで最後の1人を射出する！　そして1体だけ残った。

「でおれは？」

答えは空からドラゴンが火球で教えてくれた。あの頑丈なゲンキジが粉々に消し飛んだ！

『スパイラル！　何やってるのよ！　あんだけ注意しろっていったのに！』

「通信は後にしてくれ！　こっちは両手塞がっててゲンキジの飛来とドラゴン両方かわさないといけないんだ！」

「すいません！俺達のせいで……」

第42話

『謝る必要はないっすよ、むしろスパイラルさんが悪いっす。それに謎の爆発が原因のようですから』

「その爆発……多分俺です」

『……………』

通信中なのに息をのむ声が聞こえたのがわかった。やっぱり普通じゃないんだ……さっきの力は。

「その事についても色々話さなければならぬ……っと危ない！」

スパイラルさんが急旋回する！そこをゲンキジが落ちていった。

「あたらないのかああああ」

ゲンキジはどうやらラティカをコントロールして飛んでいる最中の浮力を得ているようだった。やっとなさくらが顔をあげて

「私……ごめんね……泣く事しかできなくて」

「さくらは気にするな……俺を狙っているみたいだから悪いのは…

…」

「2人とも責任はない」

スパイラルさんが力強く俺達に言う。決して揺るがない瞳で目を見て、

「誰かの責任を誰かに言う必要はない、責任の追及は悪循環しか生まない……誰かが責任を果たせばそれでいいのだ」

さっきまで責任を追及されていた人の言葉には聞こえなかった。

「そうだろ？ ベル！」

女性が横切った凜々しい表情をした女性は、まったくと言わんばかりに笑っていた

何がそうだろうによって図々しい男だ相変わらず……だが、

「私が暴れる機会を作ってもらって感謝もしているわ！」

何故ジェリーベルが船長の隣にいるか？ それは……

「ギルスローブ海賊団副船長ジェリーベル・ウェントリー、ギルスローブ海賊団のナンバー2の実力骨の髓まで味わえ！」

銃を取り出し空に打つと、テープのようなものが射出された。

「線に意味を持たせる力！ 性質は鞭……色は桃色にして愛をイメージ！」

線が鞭のようになり色が桃色になり、迫ってくるドラゴンの1

体にあてる！　するとドラゴンが近付きベルさんを背に乗せる。
銃のトリガーを引くと鞭になっていない部分が切れて鞭が独立した。

「性質は棘……色は赤色にして激しい爆発をイメージ」

飛んでいるゲンキジに打ち込んでいくのは赤い棘、刺さった者が次から次へと爆発していく。さらに

「鞭の色を青色に変更、気を静めるイメージに」

桃色の鞭が青色に変わっていく……ドラゴンに次々打ち込んでいく！

「ほらっ円に戻りなさい！　そこっ！　落ち着きなさい」

ドラゴンに乗りゲンキジを爆破しながらドラゴン達を円に戻していく魔王がそこにいた。

「ふふふっ！　これが楽しいのよね！　はっはっはっは！」

「ベルさんって結構危ない人？」

「性格的に一番戦場上げてはいけないから船長の補佐なんだ……わかっただろ」

俺達はひきつった笑いしかでなかった……その間もベルさんは高笑いしながらドラゴン達をおとなしくさせていく。

凄いけど怖ッ！ こっちに飛んでくるドラゴンはいなくなりゲンキジが、少し飛んでいるだけだった。

「おんなこわい。おんなこわい。おんなこわい。」

ゲンキジが怯えている…… どんだけだよベルさん！

『スパイラル！ そっちに2体抜けたわ、かなり強敵よ！』

その通信と同時に空が暗くなり、見上げると黒い刺々しいドラゴンが飛んでいた。地響きと共に地面にはギロチンのような角を持つドラゴンが山を砕きながら追ってきていた。

「さすがにゲンキジのボスとこいつら全部相手にするのは不可能だな……」

「えっ！ どうするんですか！」

この人達ならなんでもできると思っていた分ショックが大きかった。さくらの戸惑いを隠せないようだった……

「大丈夫だ、上を見ても…… 主役は遅れてくるものだ」

上を見ると赤い空に異変があった。銀。

銀が差し込んでいた！

『お父さん！ なんて味方の船待たなかったの！ 生身による大気圏突破はあれ程危険だって言ったのに！』

フリードは待たなかった！ 迎える何も……それどころか今のフリードには何も届かないだろう。銀。さっきまで白髪のイメージの髪は刀と同じ銀に見えた……。まるで無機質な刀となっているようだった。

「敵は殲滅完了……。仲間を助けなければ」

バルニアの群れが見るも無残な姿になっていた。

『非情なる銀剣』

と人は呼ぶ。戦争を力で駆逐したフリードのもう1つの姿であった。

フリードは星を見下ろす……。常人をはるかに超えた視力でスパイラルを補足し、落下した。

第43話

剣で星の力を斬り、ラティカを絶対的な安定感で制御し高度変化による影響をゼロにしていくな。

赤い星からしてみたら異常は、この銀だろう……滅びの色が飛来した！

その襲来で黒い竜は地面に叩きつけられた！ 凄いとしか言えなかったんだが……何故だろう？ 怖い——頼りがいのある人が来た……なのに

「フリードの奴……スイッチ入ってやがる」

歯を食い締めるように言うスパイラルさんはどこかさみしそうだった。

「寒い……なんでこんなに寒いのか？」

「さくら？ 確かに俺も体が震えてる……」

違う……危険を感じて体が寒気を感じているんだ。血を初めて見たときのようないや、その先にある骨を見たような寒気。

何故？ 答えはフリードさんから出ているおびただしい殺気と無機質な銀のイメージ……空も怯えているように銀の雲に覆われ雨を降らせた。風が強くなり、大地が叫ぶように地響きを起こしていた。

「逃げるぞ！ ああなったフリードは危険だ！」

「フリードさんが危険ってどういう事ですか？ この寒気も気候も全部フリードさんが原因なんですか！」

俺の叫びを聞いてるのかもわからない顔でさっきの倍のスピードで移動する……すると戦艦が見えてきた。

「ロイドの奴、おもったより速いじゃねえか。助かる！」

「スパイラルさん後ろ！」

「何！」

赤いゲンキジが他の奴らを投げてきた！ それを回転で弾いていく！ だが

「狙いは船か！」

弾けなかったものは戦艦に向かっていく！ それを風を操り、逸らした。

「それを……待っていた……鬼慟砲！」

赤いゲンキジが俺達のせいで手がふさがっているスパイラルさんに口から出てきた砲で狙いを定める……あのスパイラルさんが焦っていた……それでも

「受け取れ！ ロイド！」

俺達を全力で投げて戦艦に投げた！ でもスパイラルさんは？

スパイラルさんは防御の姿勢を取っていたが、あの砲台は危険な筈だ……確か空母を一撃で大破させた威力を持っていたはずだ。

「スパイラルさんが危ない！　くそっ助けられてばかりで何もできないのか俺達は！」

「いやついやああ！　イヤああああっ！　もう私達だけが助かるなんてイヤっ！」

さくらの体が黄色く光った気がした。その光はスパイラルさんを瞬時に包み……爆音とともに放たれた砲撃を分散させた！　つまり上下左右に爆発が全てそれたのである。

「馬鹿な……タイミング……距離……威力……全て十分だった……何が」

赤いゲンキジはこっちを見ながら……いや正確にはさくらを見ながら

「……消さねばなるまい！　予想が正しければ……危険だ！」

鉈のような武器を構え、宙に浮いてるさくらに襲いかかる！

「何が起こったかわからんが……させるか！　貴様の相手は俺だ！」

スパイラルさんが体勢を立て直し、後ろから踵落としをする！　するととてつもない速度で地面に打ち付けられた。

「2人とも掴まれ！」

スパイラルさんに掴まると今度こそ戦艦の上まで運んでもらえた。

「2人とも！ こっちへ」

ロイドさんの声がする方に行くと中に引き込まれた！

「ここの壁は人間だけ通すを通す特殊な壁なんすよ。2人とも無事でよかったす」

「なんでもありませんね……ここは」

「それよりロイドさん！ スパイラルさん達は？」

「心配しなくてもいいすよ。もう終わるっすから」

「スパイラルといったな……何故邪魔をする……貴様達には聞こえないのか……神の声が」

「悪いが神は苦手だね、それに貴様らの信仰する神はなんだ……まさか邪神か？」

「奴を……我らの神と認められるわけないだろっ」

邪神……魔族に嫌われている魔の神である。赤いゲンキジが信仰しているのは、おそらく――

「終わりの神デイスピアがまだ生きていてもいうのか！」

始まりがラティカならデイスピは終わりの神……原初の神戦において最後まで戦ったと言われているスパイラルでさえ知っている原神の1人である。

赤いゲンキジは長くなった腕を使って反動をつけた一振りを放ってくる！　だが、今のスパイラルにそんなものが届く筈がない。手で触れた筈なのに鉋を捻じ曲げる！

「むうう！　……何故分からないのだ……何故邪魔をするのだ……世界の意思を！」

世界の意思……その世界の意思によって傷ついた男を知ってるから……それでも進んだ男を視てきたから！

「分からないから人生は楽しいんだろうが！」

フリードリヒ・ギルスロープの結論を叫びながら己の罪をつぶすように……

「なんだ……体が重い……空が……まさか」

スパイラルの力で回転していた空が、赤いゲンキジをやさしく抱くように風を送り……

死の言葉が贈られた

第44話

「天は竜の怒りを知り、地に落ちる」

絶対的な圧力が赤いゲンキジに降り注いだ！

「神よ……私はどうすれば」

圧倒的な圧力の前でもなんとか形を保っている赤いゲンキジに

『まあ、てめえは頑張ったよ……だが悪いがてめえは引き立て役なんだよ……そうそうと退場しな！ ありがとうよお！ これでめえの信じる神である俺様は上機嫌だ』

その瞬間理解した……私は信仰していたのではない……この声に操られていた事に！ 赤いゲンキジは理解と共に天に押しつぶされた……

斬撃と破壊音が響く山の中にフリードはいた。

黒く刺々しいドラゴン……ユラズレイジ、ギロチンのような角を持つドラゴン……ガレイレンデンは圧倒されていた。

ドラゴンホールを乱したものを本能のままに殺しに来ていた2体のドラゴンは、本能的に感じ取っていた。目の前の男は戦ってはいけなかったと！

ギイーン！ ズン！

角を一振りすれば大地は裂ける……口から放つ火炎は山脈の形を変える程の熱だが！

「……はああ！」

刀を抜き一閃……それだけで角の一振りは弾かれ、火炎は消し飛ぶ！ 圧倒的な力の差に戦慄が奔る……これが『非情なる銀剣』の実力だった。

「終わらせる」

やばいと感じ取った2体は同時に攻撃する！ ギロチンの角は天を切り裂くように下から上に振り抜かれ、黒いドラゴンは全身の棘が赤くなつていき高熱のフィールドを作りだし、地を！ 天を！ 消し飛ばす火炎を打ち出す！

「堕ち斬り」

2体の真ん中に放った斬撃は2体を飲み込み地面に打ち込む！

「GRYAAAAAAAAAAAAAAAAA」

何があつたかも分からず悲鳴を上げる事しかできないドラゴン2体……その間も体が徐々に切り裂かれていく。

フリードの雰囲気に戻っていく……いつもの船長に、

「簡単だ……その斬撃には大量のラティカが詰まってる。重力できた斬撃を地面に滞在させておけば、そこに吸い込まれていく」

つまり重力で、できた蟻地獄——ラティカコントロールだけこんな事ができるのか？ 答えはフリードだからできる！ 他のドラゴン達は仲間がのまれていくのを見ることしかできなかった。

この戦いをみて、少年少女はある思いに駆られていた。この人達についていけば地球を救えるかも知れない。いやこの世界の力を使いこなせば俺達でも救えるかもしれない！

憧れと期待は2人のこれからを決めるには十分だった・・・

モケッド・コロウはゲンキジを全て倒したのに、状況を全て視ているだけだった。そこにフリードが現れた……モケッドはそれを待っていたようにマルチランサーのスイッチを入れる。

「ご苦労様でした……モケッド、フリード」

「どこから文句言ってほしい？ 未来を視るものエルディアーナ！」

フリードは怒鳴って問い詰める。モケッドも止めなかった……

「エルディアーナ様……確かあなたは安全な場所として村にいくように指示しました。私が何か間違えたんでしょうか？ 何故あそこにゲンキジが待ち構えていたんですか」

敬意を払いつつも語尾を強めにしている。モケッドの言葉にフリードはさらに乱暴に聞く。

「全部てめーのシナリオ通りってか！ 確か今回の依頼は俺指名でルートも指定だったな！ 本当に偶然あのルートに救難信号が出てる宇宙船があったともいうのか！ エルディアーナ……はつきり

言ってやるつか。

お前最初からこうなる未来を視てやがったな！ この未来を回避する方法はあったはずだ！なのにこの未来を選んだ理由はなんだ！ 答える！」

回避できた筈である未来を視る者が目の前にいるのだ。2人を保護すると言った存在が平穩の生活を奪ったのである——フリードの怒りも最もだ。

「これがワールドアクターのやる事か！ エルディアーナ！」

ワールドアクター……神の上の位とまで言われている。世界の主役とも云われている存在で、エルディアーナは神託をもちながらワールドアクターの称号を持っている唯1人の人間である。

「私個人としては平和に暮らして欲しかった……しかし世界はそれを認めなかった。未来は残酷過ぎるのです」

「話が見えねえな……てめー以上の存在がいるっていつのか？」

「デイスピア・ディエゴルティアを知っていますね……かの神が復活しようとしています」

沈黙が訪れる……魔物の王にして、始まりの神と同等に戦った伝説の魔獣である。

「エルディアーナ様！ でしたら2人は危険なではありませんか？ この世界の未来の為に処分を決めなくてはいけないのでは」

「エルディアーナ……2人を使って原初の神を制御しようとしてい

るのか？」

「……まさか……しかし」

「近い未来……今回のように原初の神による大規模な干渉が起こるでしょう……それを食い止められるの者は」

「浅田勇人と神宮さくらの2名ってか……それで俺達もその戦いに加わる事になるんだな」

フリードは常に会話の主導権を握ろうとする……さもないと聞きたい事が聞けなくなってしまうのだ……それがエルディアーナという女性である。

「私の視る未来は世界のあるべき姿です……わかりますね？ フリード、モケッド……例えば誰を犠牲にしようとする世界を変える事は許されないのです。彼らを利用してでもディスピアを制御して見せます」

確固たる決心の言葉にフリードは少し考えた後

「あいつらの意思次第では俺達の仲間にする……文句はないよな？」

「お願いできるの？」

「お前は信じられないが、あいつらの気持ちは本物の筈だからな」

ほっとするエルディアーナに最後に一言放った

「ディスピアってなんなんろうな？ お前から神託渡したのに、なんでそいつからの力をあいつらが受けたんだろうな……まるでラテ

「イカ以外の力があるみたいだ」

爆弾発現を残して去るフリード……後には放心状態のモケツと苦虫をかみつぶしたような顔をしているエルディアーナだけが残った。

「エルディアーナ様……どこまで知っていたんですか？ 今回の未来を」

「私がそれを答えるとして……あなたはどこまで信じます？」

「全てをです……エルディアーナ様」

一礼するモケツドに……

「とりあえず帰ってきなさい。それからね……話は」

「はっ！」

[illegible]

第45話

フリードさん達が戦艦に帰ってきた……怪我也特になさそうだった。モケッドさんが俺達を心配して駆け寄ってくる。

「2人ともご無事でしたか！ 心配しておりましたぞ」

「はい……ありがとうございます」

「……さくらさんどうかしましたか？」

さくらの顔を見ると少し高揚し、緊張しているようだった。さくらも覚悟を決めているようだった……俺ももちろん言うつもりだが、フリードさんに怒られた事が響いているのだろう。俺に相談しないで自分の意思で告げようとしていた。

「私……自分では、何もできないかもしれない。でも何かやりたいんです！ ただ暮していくなんて耐えられません。モケッドさん・ごめんなさい！ 私フリードさん達についていきます」

力強くここにいる全員に届く声で自分の気持ちをはきだす。続けて俺も思いをぶつける。

「俺も同じ気持ちです！ お願いします……どんな仕事でもしますから、俺達を連れてって下さい！」

……沈黙の後、起こったのは拍手と歓迎の声！

「いいのか？お前らが想像しているより、この世界は残酷で厳しいぞ」

フリードさんがニヤニヤして近付いてくる……俺はしっかりと目を見てそれに答える

「望むところです……頑張っついていきますよ、俺達は！」

さくらも初めてフリードさんの目をみて頷く……すると満足そうにメインデッキの方に足を進めていく。

「認められたようですね……2人の選択がよりよい未来に続く事を我が神に祈っております」

モケツドさんは一礼して去っていった……そしてアクアさんが近付いてきた。

「おめでとう！これからよろしくね……それで、あの勇人君大丈夫なの……腕は」

「腕？」

言われて思い出したように痛みがやってくる。そういえばゲンキジ殴った時に大怪我したような……

右手を見るとそこにあったのは変な方向に曲がり熱で焼かれた何かだった。しかし不気味なくらいはつきりとラティカの恩恵は残っていた。それには気付かず俺は、誰か教えてくれよ……と文句とともに意識が消えた――

「勇君起きた？」

「さくら？　ここは医務室か……また倒れたのか」

腕を見ると痛々しいくらい包帯が巻かれていたが形は整っていた。

「あれ？　俺の腕、大分治ってる……そんな馬鹿な」

あんな大怪我がすぐ直るか？　疑問に思っているとココアちゃんが傍で寝ていた。

「起こさないようにね……アクアさんとかに聞いたただけなんだけど治療系能力者が、だいたいを直して薬とココアちゃんの応援で自然治癒力を高めたんだって」

突っ込みどころがいつもながら多いが今は……

「ありがとっな、ココアちゃん」

するとドアが空いてアクアさんが静かに入ってくる。

「起きた？　だったら船長が呼んでるから来てもらえる」

そついうとココアちゃんを抱きかかえて連れていく。

「むにゃあむっ……おとっにゃんちゆきー」

フリードさんここにいたらどうなってたんだろう……それはそうとその船長が呼んでいるんだよな。

「さくら行こつぜ」

「うん……メインデッキはあつちだよ」

カチカチになつてゐるさくらに溜め息つきながら、

「まだフリードさんが苦手なのかよ、あの人は怖いけどいい人だつたろ」

歩きながら話しかけると首を振りながら、

「勇君……私達とんでもないところに入っちゃったみたいよ。勇君が考えてる海賊なんてもんじゃないかも知れないくらいの組織に」

大げさなものの言いにポカーンとする。俺は笑いながら

「大袈裟な事言つてなんだ？ まだ驚く事があるつて言つのか。もう何が出てきたつて驚かねえよ……ロボットか？ 獣人か？」

メインデッキに向かう外が見える廊下の外を指さす。そこには戦艦の大群があつた……艦隊という言葉が似合う鋼の宇宙がそこにあつた。

「なんだこれ！ もしかして全部敵！ 囲まれてるのか！」

「敵が並んで同じ方向にどうするわけねえだろうが」

フリードさん達が満面の笑みで待っていた。敵じゃない？ これだけの数の味方？

「ギルスローブ海賊団またの名を貿易会社ギルスローブ！ 総人員数約5000万人を抱え込む大企業にして大海賊！」

はっ？ 日本の人口分の半分がいるっていつのか！

「ワールドラティカ最大規模の海賊団ギルスローブ海賊団が、諸君らを歓迎しよう！」

——どうやら俺達はとんでもないところに来てしまったようだと改めて認識することになった。

暗闇の中——どこまでも黒い暗闇の何かがいた。

『役者は揃った……さて舞台の幕が開くまでしばらく休むとしよう……楽しみだ……ああ、なんて楽しみなんだ』

邪悪な獣は静かに目を閉じる。次の舞台を見る為に――

第1章 閉幕

第45話（後書き）

やっと1章閉幕です。とりあえずこれで1章は終わりました2章からは世界観説明を詳しくするなど。私の作ってきたものを表現できればなとおもってます。

時間はかかるとおもいますが、頑張っていけます！ よろしく願いします！

感想で様々な声が聞けて嬉しかったです！拙い文章ですが、暖かく見て貰えると光栄です。それでは失礼します

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0834u/>

ワールドアクター

2011年12月3日20時01分発行